

泉森窯跡 坂ノ下遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第129集



2004

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



いすみ もり かまあと さか の した いせき
泉森窯跡 坂ノ下遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第129集

平成16年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





泉森窯跡 SQ1 最下層遺物出土状況（北から）



瓦葺き方



出土土器集合

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、泉森窯跡と、坂ノ下遺跡の調査成果をまとめたものです。

泉森窯跡と、坂ノ下遺跡は山形県の北西部に位置する酒田市に所在します。酒田市は山形県内を貫流する最上川が日本海に注ぎ込む河口に発展した商業地で、庄内平野からの良質の米穀を日本海で運ぶ北廻船の寄港地としても有名な都市です。また、出羽国府跡として擬定される城輪柵跡が所在する町もあります。

この度、平成13年度中山間活性化ふれあい支援農道整備事業（飽海中央地区）に伴い、緊急発掘調査を実施しました。

泉森窯跡では、古窯跡1基と土坑1基が検出され、古窯跡には山の斜面を利用し、焼き損じた遺物を捨てた広い部分が確認され、中には当時の食器類や建物の屋根を葺く瓦片が多数出土しました。瓦は、城輪柵跡の政庁域に近い所で出土した瓦と同様で焼かれたもので、出羽国府と言われる城輪柵跡との関連が今後の研究の貴重な資料として得ることができました。また、坂ノ下遺跡では狭い範囲に多数の掘立柱建物跡が確認され、泉森窯跡を営んでいた人々との関係に興味があるところです。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民の財産といえます。この祖先の足跡を学び、祖先へと伝えていくことが、私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 宰

例　　言

- 1 本書は、中山間活性化ふれあい支援農道整備事業（飽海中央地区）に係る泉森窯跡及び坂ノ下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、調査説明資料などの内容より優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県農林水産部及び山形県教育庁社会教育課文化財保護室の委託により、財團法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査要項は以下のとおりである。

遺　跡　名	泉森窯跡	坂ノ下遺跡
遺　跡　番　号	平成13年度登録	平成13年度登録
所　在　地	山形県酒田市生石字泉森	山形県酒田市生石字坂ノ下
調　査　主　体	財團法人山形県埋蔵文化財センター	
理　事　長	木村　宰	
受　託　期　間	平成13年7月1日～平成14年3月31日	
現　地　調　査	平成13年7月14日～9月1日	
整　理　期　間	平成13年8月20日～9月14日	
調　査　担　当　者	調査第一課長　野尻　侃（泉森窯跡調査主任） 調査第三課長　佐藤正俊（坂ノ下遺跡調査主任） 主任調査研究員　伊藤邦弘 調　査　員　豊野潤子 副　調　査　員　石垣岳彦	

- 5 本書の作成、執筆、遺物写真撮影は野尻　侃が担当した。又、巻頭写真的集合写真で、瓦は水戸部秀樹調査研究員が、土器の集合写真は須賀井明子調査員が撮影した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。

航空写真測量　シン技術コンサル・資料サンプル分析・パリスサーヴェイ

- 7 出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。
- 8 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（順不同、敬称略）

山形県農林水産部、山形県庄内総合支庁酒田農村整備課、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、庄内教育事務所、酒田市教育委員会、小野　忍、川島崇史、八幡町教委　大川貴弘、仙台育英高校　渡邊泰伸、山形市教委　須藤英之、致道博物館　酒井英一、鶴岡市教委　眞壁　建、佐藤楨宏、富樫泰時、舟木義勝、石舞岡誠一、東北芸術工科大学歴史遺産学科生　藤原英幸・森　秀秋

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。

S Q	窯跡	S K	土坑	S B	掘立柱建物跡	E B	建物跡の柱穴
S P	ピット	S X	そのほかの遺構・性格不明遺構				

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

- 3 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（日本測地系）により、高さは海拔高で表す。

- 4 本文中の遺物番号は、遺物実測図・写真図版とともに共通とした。

- 5 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2002年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I	調査の経緯	1
II	立地と環境	4
III	遺跡の概要	5
IV	泉森窓跡	6
V	遺 物	10
VI	坂ノ下遺跡	45
VII	考 察	49
	報告書抄録	卷末

表

表1	出土遺物観察表（蓋）	10	表5	出土遺物観察表（S K 2）	30
表2	出土遺物観察表（坏・高台付坏・台付皿）	16	表6	出土遺物観察表（軒丸瓦）	42
表3	出土遺物観察表 (台付皿・横瓶・短頸壺・蓋・三耳壺・長頸壺・瓶・甕)	17	表7	出土遺物観察表（丸瓦）	43
表4	出土遺物観察表（甕・小甕・小型甕）	18	表8	出土遺物観察表（平瓦）	44

図 版

第1図	遺跡位置図	2	第18図	出土土器（大甕3・小甕）	26
第2図	遺跡概要図	3	第19図	出土土器（赤燒土器）	28
第3図	泉森窓跡概要図	3	第20図	S K 2 土坑出土土器	31
第4図	泉森窓跡調査概要図	7	第21図	出土瓦（軒丸瓦1）	33
第5図	泉森窓跡平面図	8	第22図	出土瓦（軒丸瓦2）	34
第6図	S K 2 土坑	9	第23図	出土瓦（瓦頭面）	35
第7図	出土土器（蓋・坏）	11	第24図	出土瓦（丸瓦1）	36
第8図	出土土器（坏）	12	第25図	出土瓦（丸瓦2）	37
第9図	出土土器（坏・高台付坏）	13	第26図	出土瓦（丸瓦3）	38
第10図	出土土器（高台付坏）	14	第27図	出土瓦（平瓦1）	39
第11図	出土土器（高台付坏・台付皿）	15	第28図	出土瓦（平瓦2）	40
第12図	出土土器（横瓶）	19	第29図	出土瓦（平瓦3）	41
第13図	出土土器（短頸壺）	20	第30図	出土瓦（平瓦4）	42
第14図	出土土器（三耳壺・長頸壺）	22	第31図	坂ノ下遺跡概要図	45
第15図	出土土器（壠・甕）	23	第32図	坂ノ下遺跡遺構配置図	46
第16図	出土土器（大甕1）	24	第33図	坂ノ下遺跡出土遺物	47
第17図	出土土器（大甕2）	25			

写真図版

写真図版1	泉森室跡最下層出土状況（北から）	写真図版16	横瓶（79～86）
写真図版2	出土瓦葺き方・出土土器集合	写真図版17	短頭壺・三耳壺（87～98）
写真図版1	S Q 1 完堀・断面設置状況・完堀・断面	写真図版18	長頭壺・壺（99～112）
写真図版2	S Q 1 完堀・灰原遺物出土状況	写真図版19	壺・壺（113～120）
写真図版3	調査風景	写真図版20	壺（121～127）
写真図版4	断面・土器出土状況	写真図版21	赤燒土器壺（128～138）
写真図版5	最下層・土器出土状況	写真図版22	S K 2 出土土器（1～13）
写真図版6	断面切削状況・完堀	写真図版23	軒丸瓦（1～5）
写真図版7	焼成部断面・燃焼部断面	写真図版24	軒丸瓦（1～13）
写真図版8	上半部断面・下半部断面	写真図版25	軒丸瓦（12～25）
写真図版9	壁面断ち割り	写真図版26	丸瓦（26～37）
写真図版10	南北断面	写真図版27	丸瓦（38～46）
写真図版11	灰原断面	写真図版28	平瓦（48～55）
写真図版12	調査風景・説明会風景	写真図版29	平瓦（56～63）
写真図版13	壺・壺（1～27）	写真図版30	坂ノ下道路全景・道傍検出状況
写真図版14	壺・高台付壺（28～54）	写真図版31	坂ノ下道路、建物跡検出状況
写真図版15	高台付壺・台付壺（55～78）	写真図版32	坂ノ下道路出土遺物

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

平成13年5月22日酒田市教育委員会文化課より、県教育委員会文化財保護室に酒田市生石地区で工事中の農道整備事業区域内で、土器や瓦の破片が多数発見されたとの急報が示され、5月24日に保護室担当職員が現地に急行し発見の状況を把握した。その結果、事業区域内に土器や瓦が散乱する台地斜面と、土器が散布する平地の二箇所が埋蔵文化財包蔵地として認定された。その後、確認された包蔵地の遺跡内容を把握するため事業区域内に試掘調査を5月28日から31日にかけて実施し、台地斜面には古窯跡（泉森窯跡）が、やや離れた平地には集落跡（坂ノ下遺跡）が確認された。6月25日には、庄内総合支庁産業経済部長及び酒田市教育委員会教育長あてに、試掘調査の結果報告を提出し、工事の実施にあたり、遺跡発見通知と文化財保護法の手続きが必要であることを指導した。このことを受けた庄内総合支庁酒田農村整備課では新たに2遺跡の発見を了承したが、現地ではすでに工事が進行していることや、計画路線の変更などが困難なことから早い時期での記録保存の発掘調査を要望された。要望を受けた文化財保護室では新規に発見された遺跡であることや、工事を中止していることなどを考慮した結果、平成13年度内での緊急発掘調査を実施することが望ましいと結論し、調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターに委託することで調整することとなった。6月28日には文化財保護室からの依頼を受けたセンターでは調査開始時期や、調査体制の再考を試み、泉森窯跡・坂ノ下遺跡を一括調査とし、現地調査を7月16日から9月14日までの期間で開始することとし、先に工事が先行する泉森窯跡の調査から進めた。

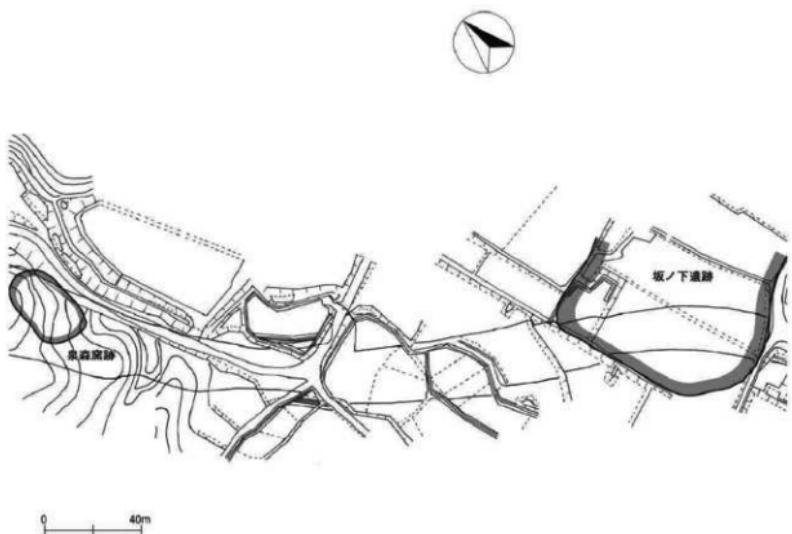
2 調査の方法と経過

調査は工事が先行する泉森窯跡から開始した。7月16日に調査器材の搬入、最初は調査対象となる区域500m²に対して伐採された杉材を取り除く環境整備から開始した。その結果、窯跡1基が台地北側斜面に、北東から南東にかけて構築されている事を確認した。一方、泉森窯跡の表土除去が終了したことから坂ノ下遺跡内の表土除去を実施、直ちに面整理作業を実施、遺構の分布状況を確認し遺構の保護処置を行ない、調査は泉森窯跡の調査を優先した。確認された窯跡は一基であることから窯跡の主軸を中心として1m単位の升目を設置し、調査グリッドとした。台地頂部に存在する煙道部は削平され、確認できなかった。窯跡頂部東側には、径70cm、深さ15cmの土坑が確認されている。また、焚口部から北部や、西側にかけては灰原が台地斜面方向にかけて広がり、調査は窯跡内部の精査と並行して灰原の掘り下げを進めた。しかし、灰原での土器や瓦の出土状況が層を重ねるように出土し、当初推測した総出土数50箱を5倍以上に越える出土量に予測され、調査計画の見直しが検討された。事業実施している酒田農村整備課にこの旨を協議し、8月10日の調査終了期間を9月14日までとすること、及び坂ノ下遺跡の調査も同時に終了することに協議が整い、8月9日には調査説明会を実施した。

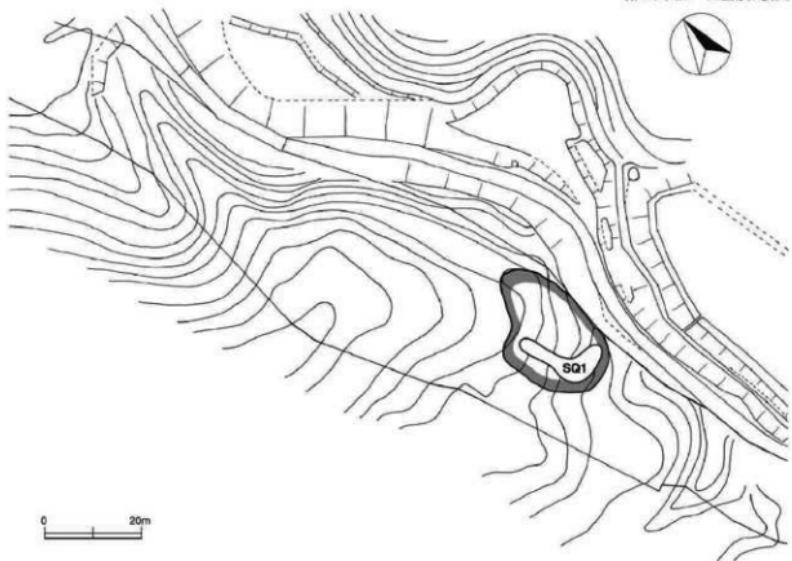


凡例	1. 泉森古跡 (古窯跡・平安)	2. 坂ノ下道路 (集落跡・平安)	3. 史跡 城崎御跡 (官衙跡・平安)	4. 史跡 堂の前遺跡 (官衙跡・平安)	5. 八森遺跡 (官衙跡・平安)
▲: 古窯跡	6. 生石遺跡 (集落跡・平安)	7. 高石地宮跡 (古窯跡・平安)	8. 新道京跡 (古窯跡・平安)	9. 山崩7遺跡 (集落跡・純文・平安)	10. 山崩2遺跡 (集落跡・平安)
●: 朱雀路	11. 山崩5遺跡 (集落跡・平安)	12. 沼田井戸跡 (集落跡・平安)	13. 上ノ山遺跡 (集落跡・奈良・平安)	14. 伊田遺跡 (集落跡・平安)	15. 伊田遺跡 (集落跡・平安)
■: 官衙跡	16. 坡興井遺跡 (集落跡・平安)	17. 北山遺跡 (集落跡・平安)	18. 高阿朱井遺跡 (集落跡・平安)	19. 南野野遺跡 (集落跡・平安)	20. 照野山遺跡 (集落跡・平安)
	21. 手掘田12遺跡 (集落跡・平安)	22. 坪田遺跡 (集落跡・平安)	23. 上野竹林井戸跡 (集落跡・平安)	24. 利瀬山古窯跡 (古窯跡・平安)	25. 山崩5遺跡 (古窯跡・平安)

第1図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1「銀鏡寺」を1/2縮小して使用)



第2図 坂ノ下遺跡概要図



第3図 泉森窯跡概要図

II 立地と環境

1 地理的環境（第1図）

泉森窯跡、坂ノ下遺跡は、酒田市街地から東方15km、庄内東部出羽山地の麓に所在する生石地区東側の丘陵に位置している。地番は、山形県鶴岡郡八幡町大字生石字泉森に所在する。出羽山地は北部に鳥海山から連なる丘陵部と、南部に月山をはじめとする出羽三山の丘陵部が並んでなっている。出羽山地の西部には広大な庄内平野を形成しており、山形県の母なる最上川が平野を貫流し、平野部を北部と南部に二分する。本遺跡が所在する地域は北部に位置し、この北部出羽山地を源流として、荒瀬川や、日向川、新井田川が日本海に注ぎ込む。本遺跡が立地する丘陵の西側には広大な庄内平野を望み、平安時代の国衙と推定された城輪柵跡を中心とした集落跡が点在する。北部出羽山地は、平野部に接する山地と出羽丘陵に分かれる。山形県企画調整部が実施した「土地分類基本調査（酒田）1978」による地形分類では、この山地と丘陵の間は谷底平野となり、粘性の強い土壤が山地と丘陵間に堆積している。このことにより、近世から現代まで、屋根瓦の粘土材として採掘され、採掘された跡は田園や湿地帯・用水池として利用されている。

泉森窯跡は東西に延びる丘陵の北斜面に位置し、標高は76～81mを測る。窯跡の主軸は北から東へ13度の傾きとなる。地目は杉の植林地である。坂ノ下遺跡は東西に長く舌状に張り出す微高地に位置し、標高は76mを測り、地目は畠地である。

2 歴史的環境（第1図）

酒田市東部の出羽丘陵には多くの遺跡が存在する。多くは中世の城館跡や、古窯跡、集落跡等で、丘陵の西側平野部には、城輪柵跡を中心とした平安時代の集落跡が計画的に配置された様相を示している。平野部と丘陵との境には南北に通る古道が存在し、大道東と呼称されている。庄内平野を二分する最上川北部は、平安時代出羽国井口の国府に比定された「城輪柵跡」を中心とした計画的な集落配置を窺わせる遺跡が点在している。政府跡から東方には堂の前遺跡、八森遺跡が所在し、公的機関としての遺跡として存在している。また、城輪柵跡より東側南方には南北に一列に集落跡が点在し、境興野遺跡、北田遺跡、閔B遺跡、高阿弥田遺跡等が所在する。また、丘陵山沿いには、北境遺跡、生石2遺跡等が所在し、平安時代には板並列や掘立柱建物跡と共に倉庫群が立ち並び、城輪柵跡に供給した米の集散地として存在する。これらは、酒田市や、八幡町、遊佐町を含めた庄内地方の最上川以北の地域が、城輪柵跡を中心に9世紀に入って、当時の律令政府が推し進めた古代東北の開拓に係わっていると考える。和銅5年（712年）に「出羽国」が成立した以降、国府や城柵の設置・移転されると共に、この地域に律令国家の支配が浸透し、周辺集落と密接な係わりを保っていたものと考える。

III 遺跡の概要

今回の調査は、平成13年5月に酒田市教育委員会が県営の農道整備事業によって瓦や、土器が工事現場から多数に渡って発見されたとの通報により確認された新たな遺跡として登録された遺跡である。県文化財保護室では早急に遺跡詳細分布調査を実施し、遺跡の内容と範囲を確認したもので、古窯跡1基（泉森窯跡）と、遺物散布地（坂ノ下遺跡）の2箇所が確認され、文化財保護法による手続きを行った。このことにより、県教育委員会では財団法人山形県埋蔵文化財センターにその調査を依頼し、平成13年7月16日から調査を開始したものである。

1 基本層序（第2図）

層序は計画農道の範囲を限定し、遺物が検出したと考える範囲について手掘りによるトレンチを14本設定し、遺構の規模と範囲を確認し、土層の堆積確認を実施した。トレンチは丘陵の斜面に対して遺構が存在すると考える地域に直角に設定し、断面からその層序を確認した。遺跡が存在する丘陵は酒田市鷹尾山丘陵南西部上に所在し、付近一帯は杉林となっている。表土は、厚さ22cmに明褐色腐植土の堆積を呈し、その下部は地山となる名褐色の粘質土が広がる。以下に層序について泉森窯跡と、坂ノ下遺跡を説明する。

泉森窯跡 第Ⅰ層 暗褐色土 雜木の腐植土が覆い、小砾を含む。表土（12~18cm）
第Ⅱ層 黒褐色土 土器片を多く含み、層下部で窯跡の掘り込みが確認される。
第Ⅲ層 明褐色土 粘性を持ち、地山層となる。窯周辺は高熱で変化する。

坂ノ下遺跡 第Ⅰ層 暗褐色土 腐植土が覆い、耕作土である。（15~25cm）
第Ⅱ層 暗褐色土 中位から遺構の埋込みが始まり、遺物が出土。
第Ⅲ層 灰褐色粘土 地山（明褐色土）との漸移層。
第Ⅳ層 明褐色土 粘性を持ち、地山層となる。

2 遺構と遺物の分布（第3図）

泉森窯跡は、鷹尾山から南西に延びる丘陵先端部に所在する。遺跡詳細分布調査の結果からは、南西に延びる丘陵の中位、北側を南にした煙出し部を確認している。窯跡の周囲下面には土器や瓦片が散出し、斜面下面に広く散布する。また、遺構は幅1.0m、長さ6m以上に確認され、一基のみの確認である。坂ノ下遺跡では、鷹尾山南西部の山麓小段丘上に立地し、予定路線上に遺物が散布したことからトレンチを設定し遺物と遺構の確認されたものである。調査では平安時代の土器と、柱穴と考えられる遺構が検出されたことから遺跡として認定したものである。丘陵上には路線以外にも広がる遺構の確認が出来る。推定範囲は段丘上が遺跡範囲となり、南北120m、東西60mに広がる遺跡である。以上の二遺跡が新規に確認された遺跡で、坂ノ下遺跡では路線内外全面に遺構が広がり、集落跡として確認される。泉森窯跡での遺物の出土量は整理箱にして413箱となり、また、坂ノ下遺跡は4箱の出土で、内2箱を掲載した。

IV 泉森窯跡

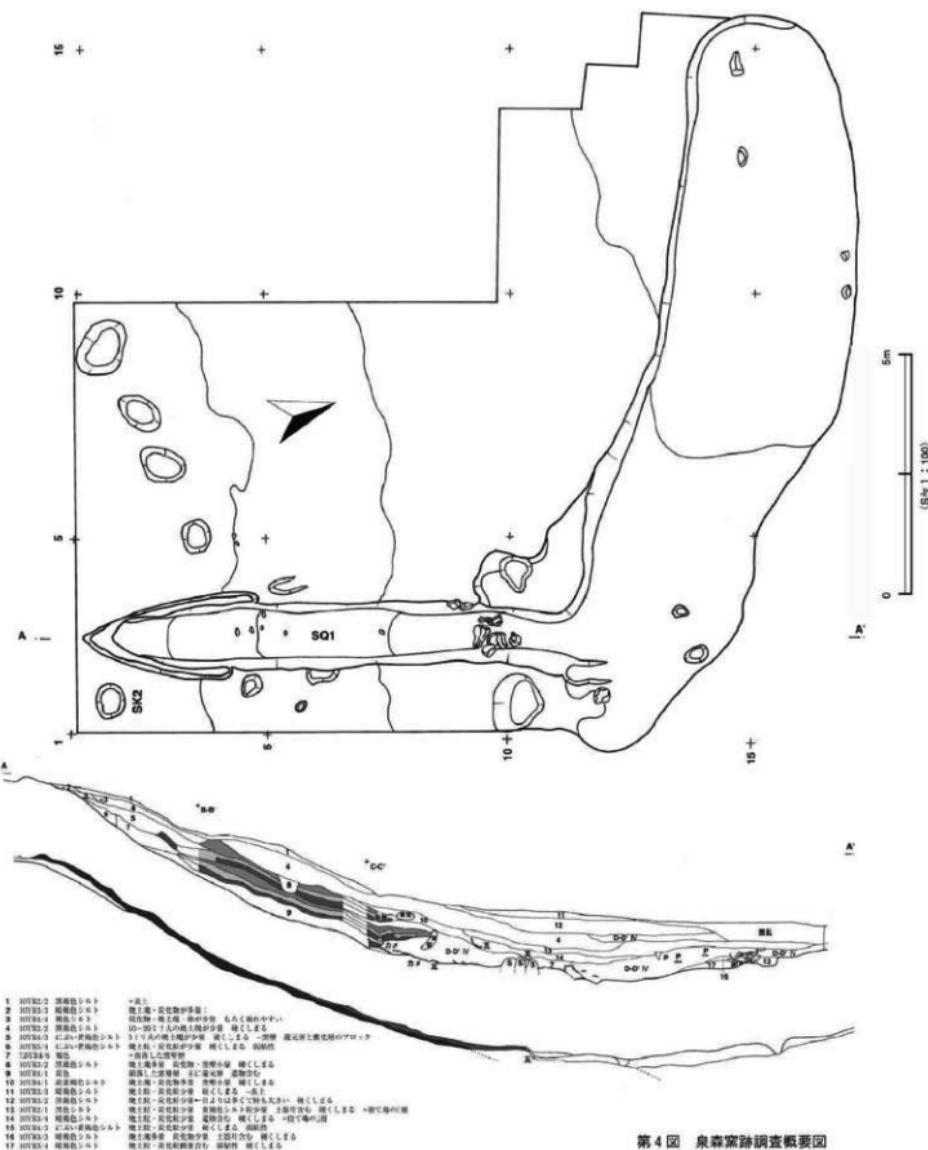
窯跡は、南西部丘陵南斜面に確認されたものである。分布調査では一基のみの確認で南西斜面に南側を煙出し部として設置している。調査では窯跡の主軸を中心とした1m単位のグリッドを設定し、窯の上部と周辺の調査を進め、表上からの掘下げを実施した。掘下げではと窯の周辺が大きく広がり、窯のすぐ左側には径約60cmほどのやや円形を呈した土坑が検出されている。

1 窯跡（第4図）

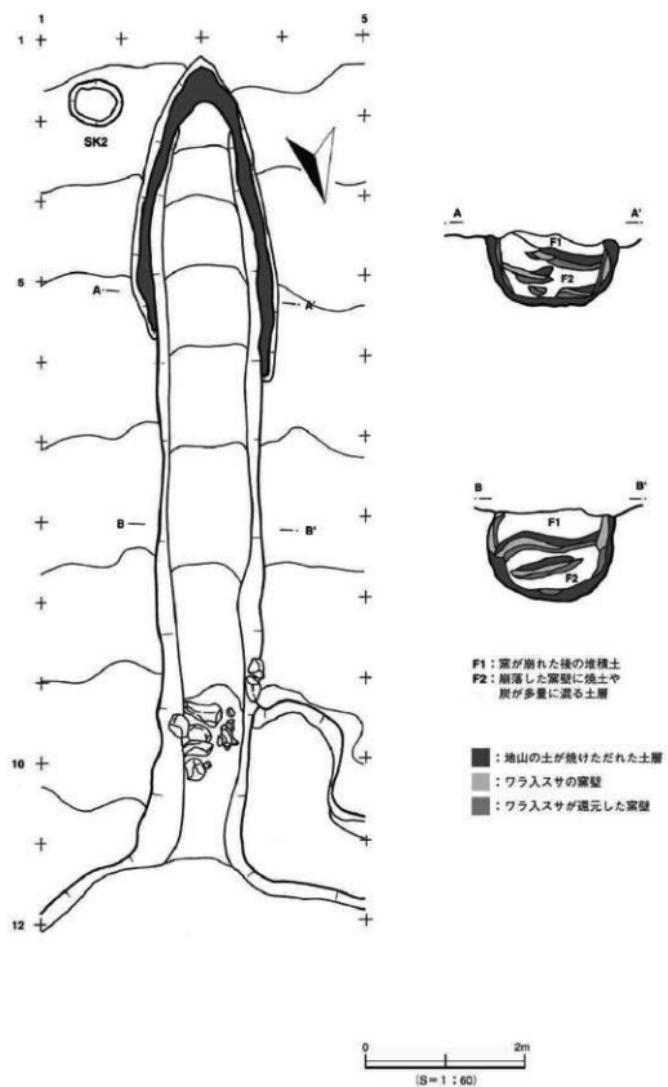
窯跡は丘陵部の中心に確認され、煙出し部を丘陵高位に位置し、焚口部を丘陵低位の南部に天井部を示し、窯は天井部が崩壊し、窓内部に充満している。規模は、全長8.7m、煙出し部で幅1.8m、深さ0.9m、燃焼部で幅1.6m、深さ1.2m、焚口部で幅1.2m、深さ1.5mである。焚口部は南部から西側に大きく広がり、灰原部となっている。灰原は丘陵斜面の沢筋に向かって西側に広がり、熱い堆積となっている。窯の壁面は高温で焼かれた状態を示し、構築された時壁面を作るときに混ぜ合わせたスサを粘土に混ぜ、壁面を形成している。また、高温により赤く焼かれた状態を示している。主軸方向に合わせ燃焼の断面を観察したところ、3回の焼成を観察し、少なくとも2から3回の燃焼が行われたことが確認されている。調査では、煙出し部では杯形土器が伏せられた状態で出土し手いたが、焼成終了時に取り上げていい状態である。焼成部では窯の上位に蓋形土器や、壺、高台付杯、台付皿、横瓶、短頸壺、長頸壺、鍋、甕等の土器破片が出土し、下位には大甕が置かれた状態で出土していた。焚口部は、幅30cmの自然石による仕切りを両側に設置し、燃焼させる松材や、針葉樹、広葉樹等の焼成材を投げ込んでいる。また、自然石で区切られた焚口は、スサを混ぜた粘土で塞がれた状態を示し、灰原と焚口部には破壊された状況で確認されている。灰原は焚口部分が大きく広がり下面に落ち込み、沢筋となる西方に広がって大きく遺物の捨場となる。捨場では平瓦片、軒丸瓦、丸瓦、甕、壺、杯等の土器片が折り重なって出土した。煙出部での断面では、幅8~10cmの焼壁土が窓底面まで確認され、地山層が焼成されたことがわかる。また、断面からは障壁が下位と、中位に堆積し、一度窓内を清掃された様相を示し、断面からは少なくとも2回の焼成が行われたことが観察されている。しかし、燃焼部では下位と上位の間にもう一枚の焦土が堆積し、2回以上の焼成が考えられる。

2 捨場（第5図）

捨場は主軸にあわせたグリッドの1~6~5~7のグリッドで確認されている。捨場は表土以外土器と腐植土から覆われ、土器片や瓦片が多く検出された。特に、堆積土の上面では杯、広台付杯、皿、台付皿、横瓶、短頸壺、長頸壺、甕、壺等の破片が多く出土し、観察からは器形が歪な形をしている。焼成後、土器の取り上げの際、供給されない製品についてはその場で捨てられたものと推測できる。出土の状況は足の踏み場も無い状態であった。調査での状況では下位で瓦片や、甕片、



第4図 泉森空跡調査概要図

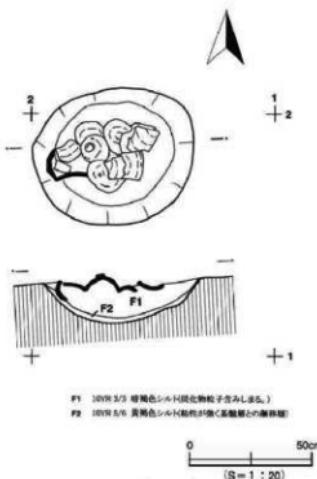


第5図 泉森窯跡平面図

壺片が出土し、中位では広台付杯、壺片、下位では杯片、皿形土器片等の出土が認められた。

3 土塙（第6図、第20図）

土塙は窯跡の左側、東側に検出された。13点の杯形土器が出土し、一括して埋められた感がある。土器はすべて杯形土器で、穴を掘った跡に置いている。土坑はグリッド1-1から検出され、窯跡のすぐ左側に存在する。深さは23cmを測り、覆土は一層であり、底面では地山との断層である。土器の出土状況からは折り重なって一括して埋設していることから同時の設置と考える。土器の形態からは同一の形態を示し、同時期の所産と考え、窯の使用が最終の使用となつたことから最後の謝礼事業の行動と思われる。



第6図 SK2土塙

V 遺物

ここでは窓跡内からの出土遺物について記述する。窓内からは煙出部、焼成部、燃焼部、焚口部、灰原部の5箇所から多くの土器が出土し、整理箱にして総数319箱の出土量である。ここでは出土土器の中で実測に耐える土器について記述する。

1 須恵器

蓋形土器（第7図1~12）

蓋は摘み部が宝珠状になるものと、宝珠が小さくなるものがある。また、宝珠が見えないものもあり、蓋の作製に時期の差異があるものと思われる。時間的なものか、作製者の違いが認められない。紐部の形状でいくつかに分けた。A類は、紐部のつまみ中心が紐部高より高くなるもの（1・2・3）、B類は紐部のつまみ中心がくぼむもの（4~12）の二つに分けた。A類の1は大きく二段に伸び上がり、宝珠形となる。器形は口唇から丸みを持ちながら立ち上がり、天井部がヘラケツリ後布撫でによる整形が施され、形状がやや丸みを持つ。2は口唇から直角に立ち上がり、天井部でやや水平に近い形状を示し、紐部をくぼませ、中心を摘ませている。3は口唇がクの字状に折れ曲がり、天井部に向かって緩やかな丸みを持ちながら紐部になる。紐部は持ち上がりながら中心で飛び出す形を示す。B類の4・5・6は紐部が小さくくぼみ、紐口唇よりやや低くなる。4の器形は口唇が大きく外側に延び、クの字状になる。体部は大きく丸みを持つ。7~12は紐部が大きくくぼみ、紐部が外反するもの（10~12）と、やや直立するもの（7~9）がある。

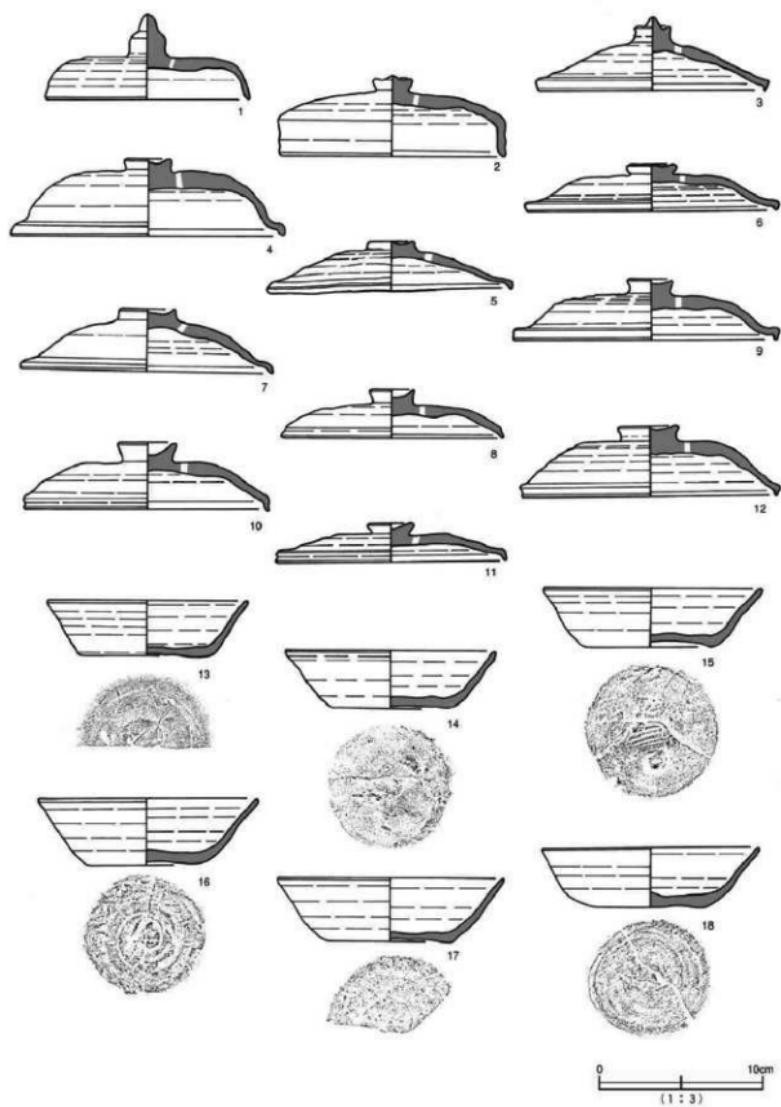
杯形土器（第7図13~第9図41）

杯は29点の土器を実測し掲載した。器形の分類ではA・B・C類の三種に分けた。土器のすべてが回転ヘラ切り離しである。A類は、底部を回転ヘラ切りで、体部が無調整のもの、B類は底部周辺をヘラによる調整が認められるもの、C類は布撫による調整と板目越し痕が認められるものがある。A類は、各図中の14・16・18~20・24・27~30・36・39・40である。B類は、17・22・23・25・26・30・31・33である。C類は、15・21・34・35・37・38・41である。しかし、C類では布撫では認められるが、明瞭な板目起しが拓本から見えるのは第7図15のみ

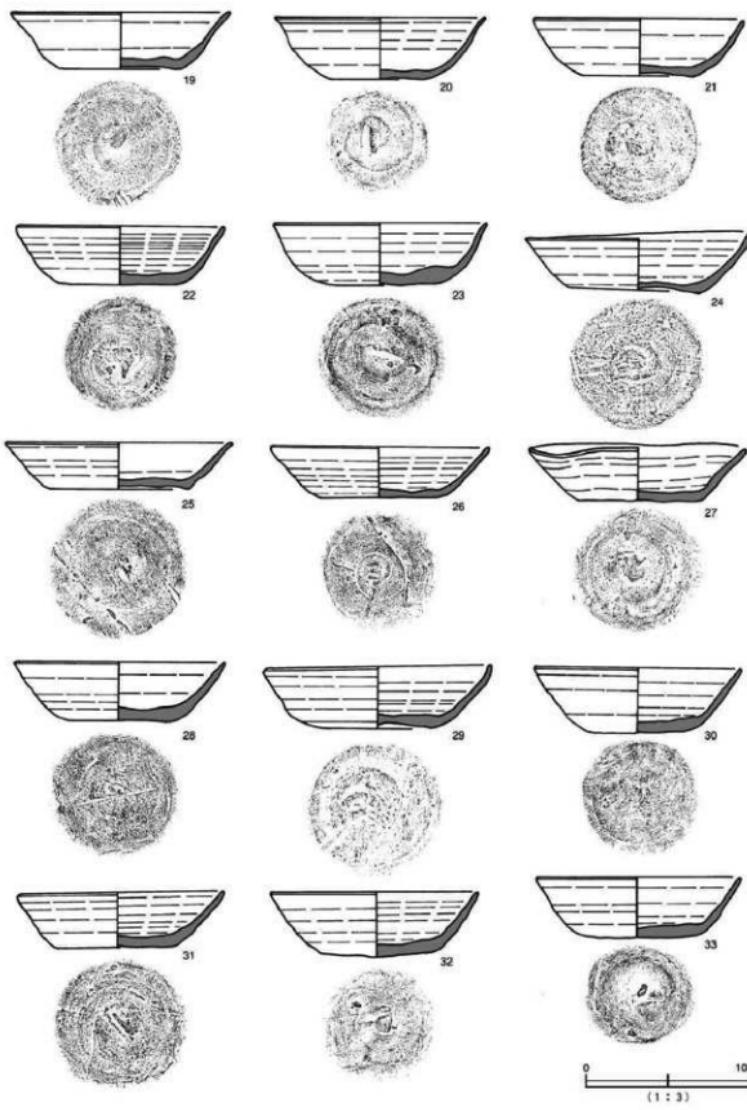
表1

番号 分類	普通 骨器 等	出土地点	種類	器形	計測値			断土	焼成	色調	調整・成形		E.P. 番号	備考	
					(1)径	(2)底面周長	(3)高さ				外削	内削			
1	6-13 II	須庭跡	素	(129)	25	27	33	5	粗砂質	堅	黄灰赤	Hue 23Y 6/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合10-14 II 10-12 II 内面朱ね地斑
2	18-19 III	須庭跡	素	(148)	30	5	56	5	粗砂質	堅	黄灰赤	Hue 23Y 5/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合19-21 III 内面朱ね地斑
3	SQI	須庭跡	素	(148)	28	12	45	6	粗砂質	堅	黄灰赤	Hue 23Y 6/1	クロロ版	クロロ版	209
4	4-12 II	須庭跡	素	(107)	29	5	47	6	粗砂質	堅	灰オーラブ	Hue 6Y 6/2	クロロ版・削り	クロロ版	複合1-12 II 2-14 II 3-1 II
5	SQI	須庭跡	素	(108)	30	6	32	2	粗砂質	堅	灰オーラブ	Hue 7T 7/1	クロロ版・削り	クロロ版	308 SQI-F308 中がみあり
6	4-11 III	須庭跡	素	(137)	25	6	29	4	粗砂質	堅	灰オーラブ	Hue 9Y 5/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合10-11 III 6-11 II 中がみあり
7	5-14 III	須庭跡	素	(156)	37	7	38	4	粗砂質	堅	灰オーラブ	Hue 9Y 6/2	クロロ版・削り	クロロ版	複合13 III
8	SQI-F308*	須庭跡	素	(137)	22	9	30	5	粗砂質	堅	黄灰赤	Hue 23Y 6/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合13 II 4-14 II
9	5-13 III	須庭跡	素	(109)	26	9	38	5	粗砂質	堅	黄灰赤	Hue 23Y 6/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合10-11 III 6-12 II 内面朱ね地斑
10	6-15 II	須庭跡	素	(152)	32	12	4	5	粗砂質	堅	黄灰赤	Hue 23Y 6/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合414 II
11	5-14 II	須庭跡	素	(141)	23	7	24	4	粗砂質	堅	灰赤	Hue 5Y 6/1	クロロ版・削り	クロロ版	複合414 II
12	5-11-13 III	須庭跡	素	(160)	33	8	4	4	粗砂質	堅	灰赤	Hue 5Y 6/1	クロロ版・削り	クロロ版	

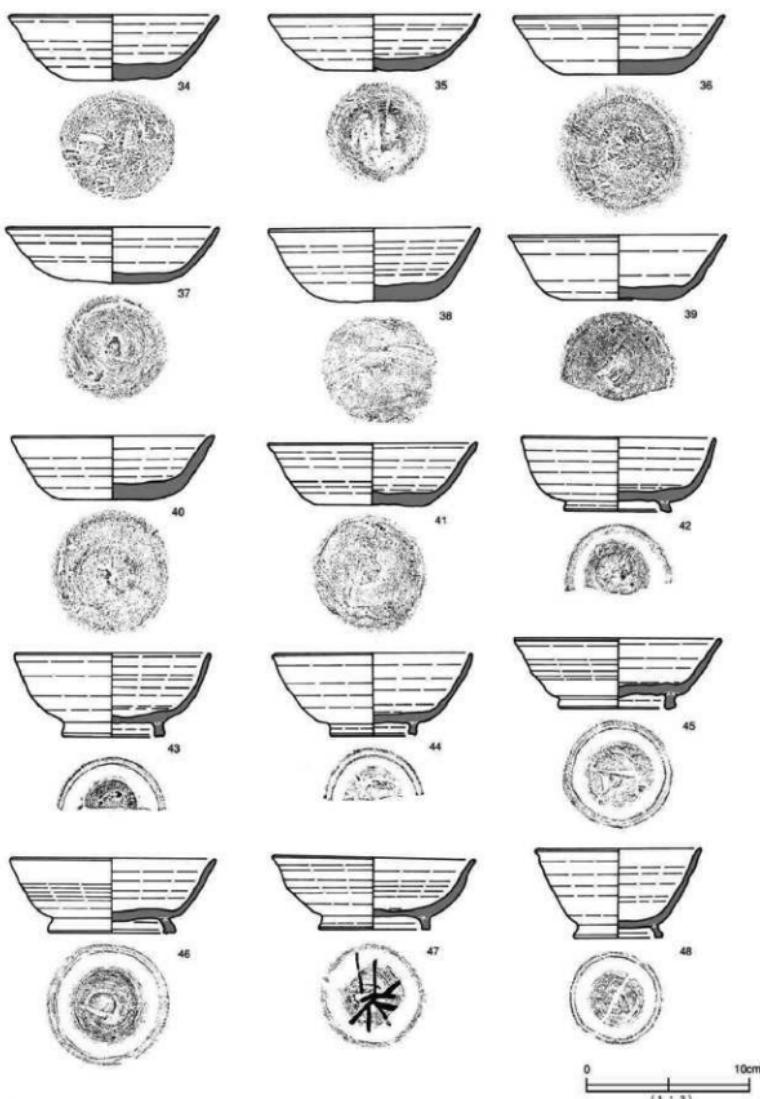
出土遺物観察表（蓋）



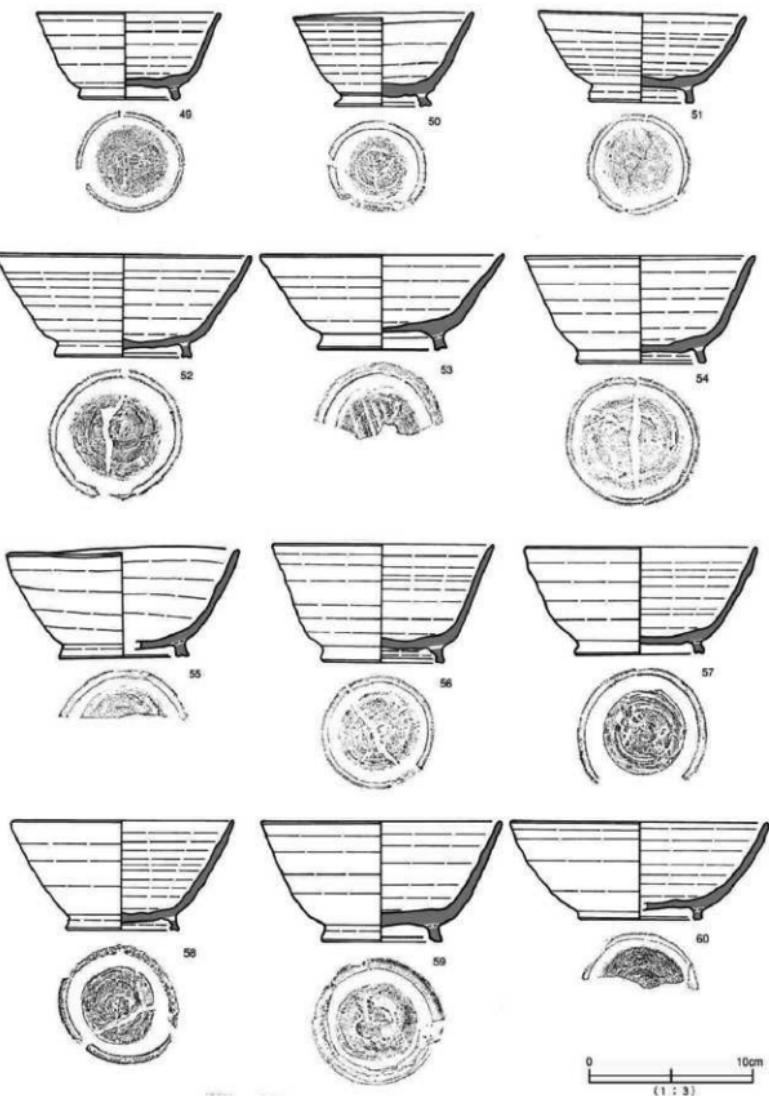
第7図 出土土器(蓋・坏)



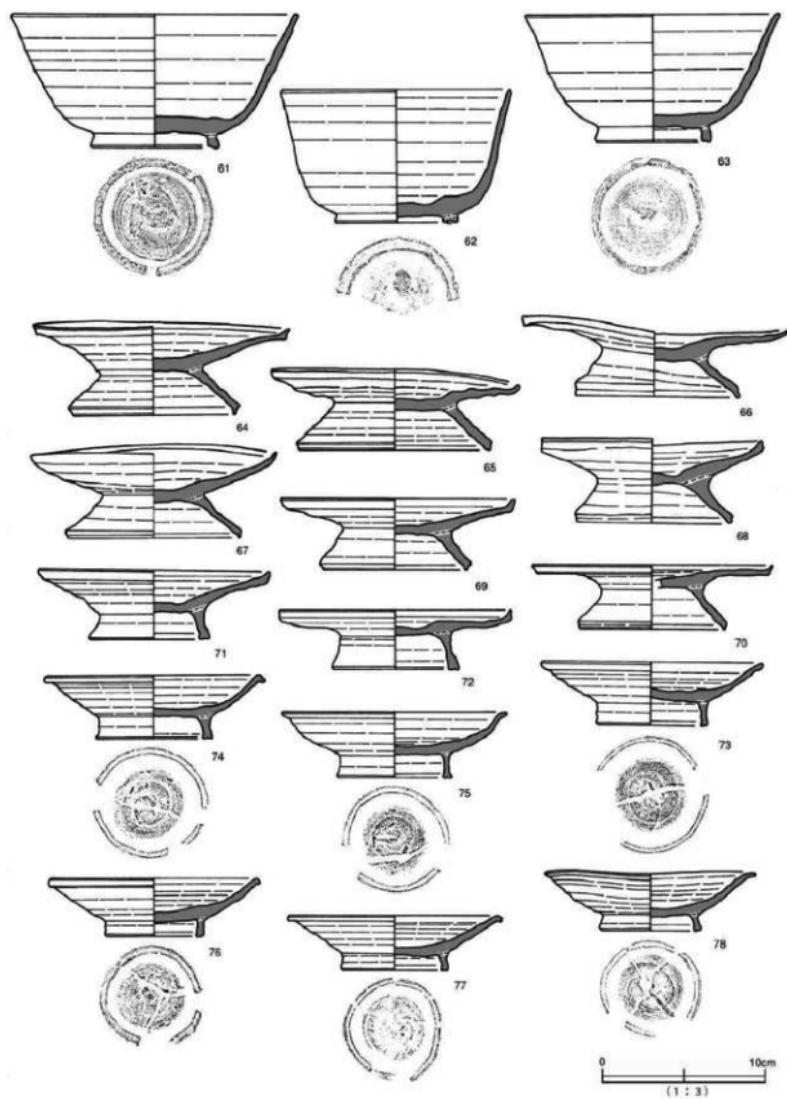
第8図 出土土器(环)



第9図 出土土器(环・高台付环)



第10図 出土土器(高台付坏)



第11図 出土土器(高台付坏・台付坏)

表4

分類番号	出土点	種別	器種	計測値					形状	地質	地質	測定・形態			新日本番号	備考	
				口径	高さ	幅	厚さ	形態				外観	内部	底部			
113 114 115	S-Q10 ¹³ S-Q10 ¹⁴ S-Q10 ¹⁵	灰陶器	壺	2000	133	227	-	239	6	粗砂質	堅	灰オーリーパ色 Hse 75Y 6-2	ロクロ板 タクタキナード	青海波アラ	-	後台7-13Ⅲ 6-12Ⅱ 内側面底付より全体があり 半球底上部斜面一部底辺となる	
	116	2-13日	灰陶器	小型壺	1000	145	151	-	111	5	粗砂質	堅	浅灰色 Hse 25Y 7-3	ロクロ板	ロクロ板	-	後台5-14Ⅰ
	117	8-15日	灰陶器	小型壺	1100	140	162	-	106	3	粗砂質	堅	浅色 Hse 75Y 6-1	ロクロ板	ロクロ板	-	後台5-14Ⅱ 表面は上部底付一端丸みを有する 半球底上部斜面一部底辺となる
118 119 120	S-Q10 ¹⁶ S-Q10 ¹⁷ S-Q10 ¹⁸	灰陶器	壺	1000	142	205	-	205	3	粗砂質	堅	灰オーリーパ色 Hse 5Y 5-3	ロクロ板 タクタキナード	青海波アラ	-	後台7-13Ⅲ 6-12Ⅱ 内側面底付より全体があり 半球底上部斜面一部底辺となる	
	119	6-15日	灰陶器	壺	101	146	428	-	256	7	粗砂質	堅	灰白色 Hse 5Y 7-1	ロクロ板 タクタキナード	青海波アラ	-	後台7-14Ⅱ 10-14Ⅳ 外側面D- E-5
	121	S-Q10 ¹⁹ S-Q10 ²⁰	灰陶器	丸底壺	-	330	-	-	10	粗砂質	堅	灰白色 Hse 25Y 4-1	ロクロ板 タクタキナード	青海波アラ	丸底	後台7-12Ⅱ 1-12Ⅲ 3-11Ⅲ 6- 10Ⅲ 6-11Ⅲ 6-15Ⅲ 8-9Ⅲ	
122 123	4-14日	灰陶器	大型壺	185	170	-	-	458	6	粗砂質	堅	灰オーリーパ色 Hse 75Y 6-2	PPH-098*	アラ板	-	後台7-12Ⅱ 1-12Ⅲ 3-11Ⅲ 6- 10Ⅲ 6-11Ⅲ 6-15Ⅲ 8-9Ⅲ	
	123	S-Q10 ²¹ S-Q10 ²²	灰陶器	壺	155	155	348	-	307	6	粗砂質	堅	灰白色 Hse 75Y 5-1	ロクロ板 タクタキナード	青海波アラ	-	後台7-14Ⅱ 8-12Ⅲ 7-12Ⅲ 9-12Ⅲ 10-12Ⅲ 11-13Ⅲ
	124	S-Q10 ²³ S-Q10 ²⁴	灰陶器	大型壺	352	239	662	-	546	10	粗砂質	堅	灰白色 Hse 10Y 6-1	PPH-099*	アラ板	193	-
125 126	S-Q10 ²⁵ S-Q10 ²⁶	灰陶器	大型壺	182	170	410	-	463	12	粗砂質	堅	灰白色 Hse 10Y 6-1	PPH-099*	アラ板	丸底	後台7-12Ⅱ 1-12Ⅲ 8-11Ⅲ 8- 12Ⅲ 9-14Ⅲ 10-15Ⅲ 外側面A-9	
	127	S-Q10 ²⁷ S-Q10 ²⁸	灰陶器	大型壺	184	163	440	-	488	8	粗砂質	堅	灰白色 Hse 75Y 6-2	PPH-099*	青海波アラ	丸底	後台7-12Ⅱ 8-12Ⅲ 9-15Ⅲ 12-14Ⅲ
	128	S-Q10 ²⁹ S-Q10 ³⁰	灰陶器	大型壺	330	278	634	-	402	10	粗砂質	堅	サブ灰白色 Hse 25G 7 6-1	アラ板	丸底	163	後台7-12Ⅱ 8-12Ⅲ 9-15Ⅲ 10-15Ⅲ
129 130	S-Q10 ³¹ S-Q10 ³²	灰陶器	大型壺	380	428	768	-	722	12	粗砂質	堅	灰白色 Hse 75Y 6-1	アラ板	丸底	後台7-12Ⅱ 8-12Ⅲ 9-15Ⅲ		
	131	3-13日	灰陶器	小型壺	145	-	72	121	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 7 5Y 8-2	ロクロ板	ロクロ板	-	後台7-13Ⅲ 8-13Ⅲ 5-14Ⅲ	
	132	9-14日	灰陶器	小型壺	120	116	109	-	74	105	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 7 5Y 8-4	ロクロ板	ロクロ板	-
133 134	3-13日	灰陶器	小型壺	145	-	72	121	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 7 5Y 8-2	ロクロ板	ロクロ板	-	後台7-13Ⅲ 8-13Ⅲ 5-14Ⅲ		
	134	9-14日	灰陶器	小型壺	120	116	109	-	74	105	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 7 5Y 8-4	ロクロ板	ロクロ板	-
	135	3-13日	灰陶器	小型壺	145	132	139	-	74	105	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 7 5Y 8-2	ロクロ板	ロクロ板	-
136 137	2-10日	灰陶器	小型壺	120	100	-	-	72	3	粗砂質	堅	灰白色 Hse 7 5Y 8-4	ロクロ板	ロクロ板	-	後台7-13Ⅲ 8-13Ⅲ 5-14Ⅲ 3-18Ⅲ	
	136	2-13日	灰陶器	小型壺	132	-	-	-	125	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 25Y 7-3	ロクロ板	ロクロ板	-	後台7-13Ⅲ 8-13Ⅲ 5-14Ⅲ 3-18Ⅲ
	137	10-14日	灰陶器	小型壺	130	130	166	-	160	5	粗砂質	堅	灰白色 Hse 25Y 7-3	ロクロ板	ロクロ板	-	後台7-13Ⅲ 8-13Ⅲ 5-14Ⅲ 3-18Ⅲ
138	4-14日	灰陶器	壺	1100	150	192	-	340	6	粗砂質	堅	灰白色 Hse 10Y 7 7-3	ロクロ板	ロクロ板	-	後台7-13Ⅲ	

出土遺物観察表（小壺・小型壺）

である。土器には回転ヘラ切りが明瞭に残す土器が多い。

高台付杯（第9図42～11図63）

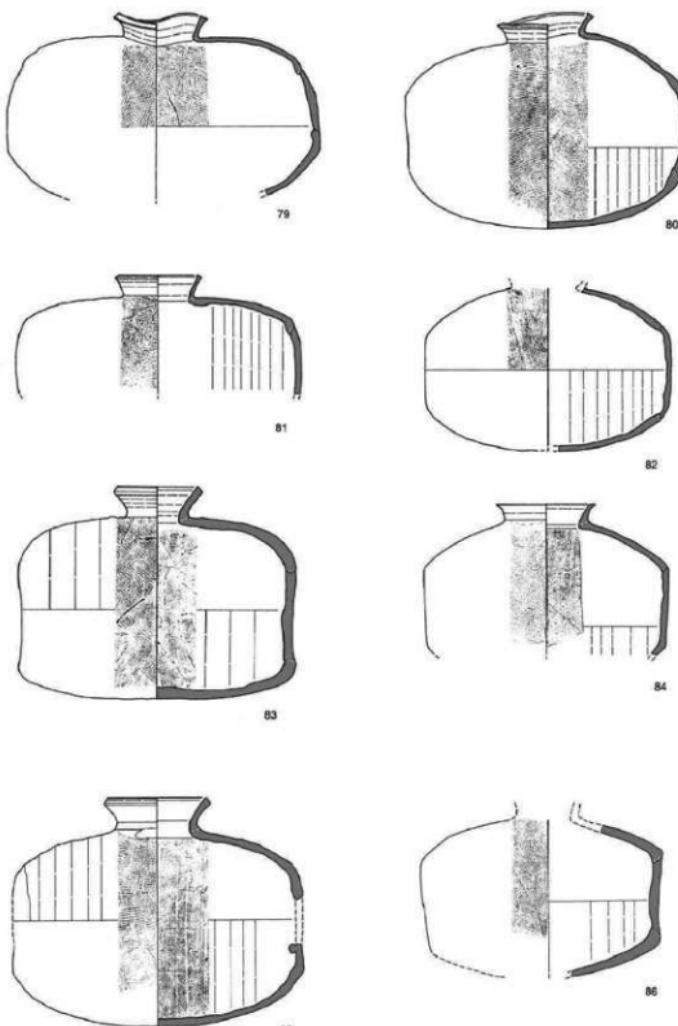
高台付杯は22点の土器を実測し掲載した。分類は器の規模から分け、A類を小型となる器で身が浅く、丸みを持つもの(42・43)と、丸みを持ちながら外反する杯(45・46・47)がある。B類は中型で身が深く、丸みを持って立ち上がるものの(48・51・52・54)と、身が深く、やや直線的に外反する杯(44・49・50・53・59)がある。C類は大型で、B類と類似するが丸みを持つもの(57・60・62)と、やや外反する杯(55・56・58・61・63)である。底部の切り離しはすべて回転ヘラ切りで、底部に高台を付す。第9図47には底部に墨痕が認められるが、字体は不明である。また、ヘラ起こし痕を残すものがある。

台付皿（第11図64～78）

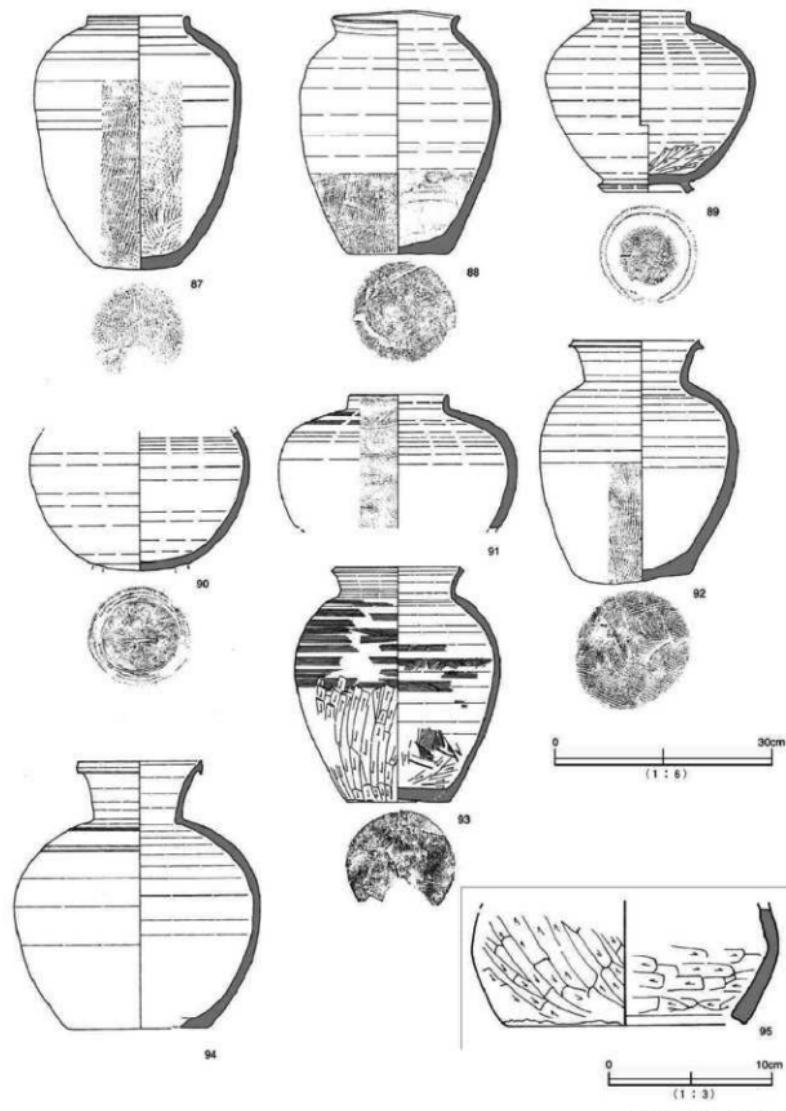
台付皿は15点の土器を実測し掲載した。皿部が水平に近い様相を呈するもの(64・65・66・69・70・72)と、皿部が深くなるもの(67・68・71・73～78)がある。台部は、ハの字状に外部に広がるもの(64～68・70)と、皿部底部でやや直立する(71・72・74～78)器形がある。皿部が水平に近いものは上部に器等を乗せるものと考える。

横瓶（第12図79～86）

横瓶は8点の土器を実測し掲載した。円筒形にした器形を示し、上半部と下半部を両端で閉栓する。外面に条線状の叩き痕を残し、ロクロ痕が観察できる。



第12図 出土土器(横瓶)



第13図 出土土器(概)

短頸壺 (第13図87~91)

5点が実測でき掲載した。丸い形をする短頸壺は底部に高台を付し (89・90) 、長胴になるものは底面が丸くなるもの (87) や、高台がつかないもの (88・91) や、底部が歪なものがある (88) 。外面共にロクロ痕を示し、条線状の叩きや、青海波のアテ痕が施される。87の短頸壺の底部は底面を繩目のタタキによって底面を整形している。89の内部には底部内面にヘラによる削り痕が明瞭に残す。

長頸壺 (第13図92~94・第14図99~106)

全面にロクロ痕をのこし、体部下半に縁位にヘラによる整形痕をのこすもの (93・99) や、下半に横位にヘラ削りを示すものがある。形状は球形したものや、肩部で張り出す形がある。底面の切り離しは、回転ヘラによる切り離しで高台を施す。93は高台を付さないが底部を粘土板で閉じている。

三耳壺 (第14図96~97)

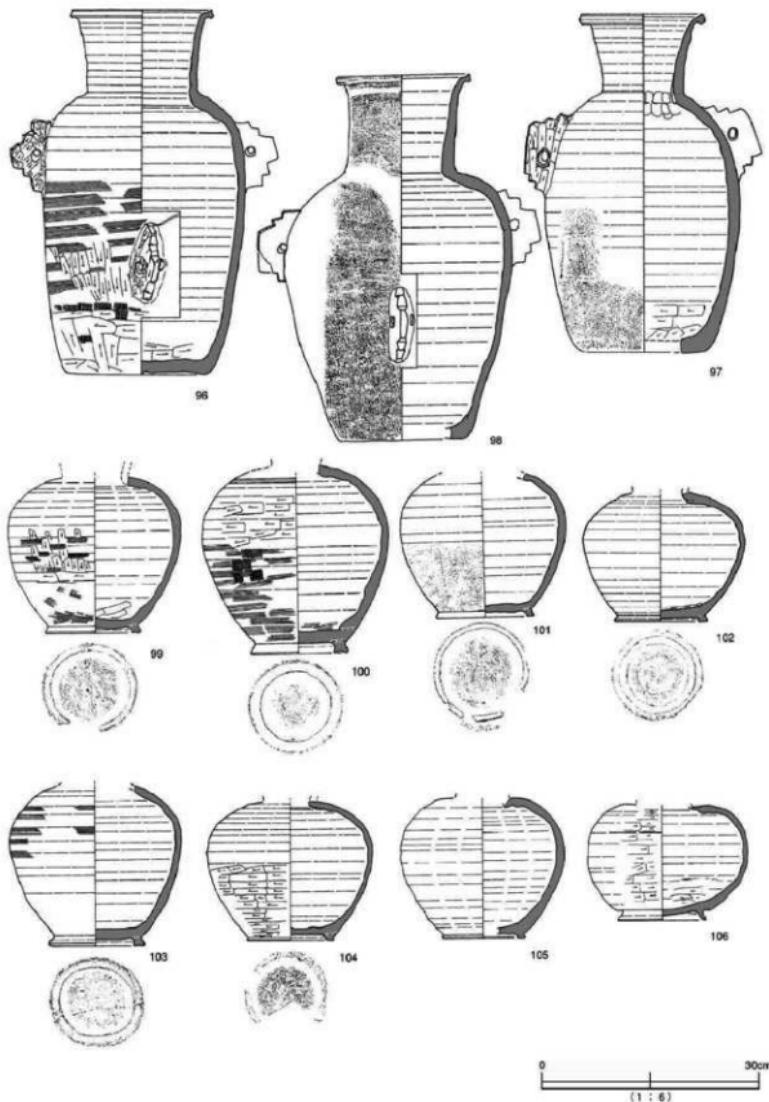
復元途中になってから双耳壺の体部中位に同様な耳が接合し、三耳となったものである。口縁が広く高い。体部と口縁部を接合し、体部に繩目のタタキ痕を残し、全面にロクロ痕を施す。耳部には中心に孔が施され、三点が三角点状になる。孔に縦状の網を掛け、飲み物を運んだ容器と考える。

鍋 (第15図107~110)

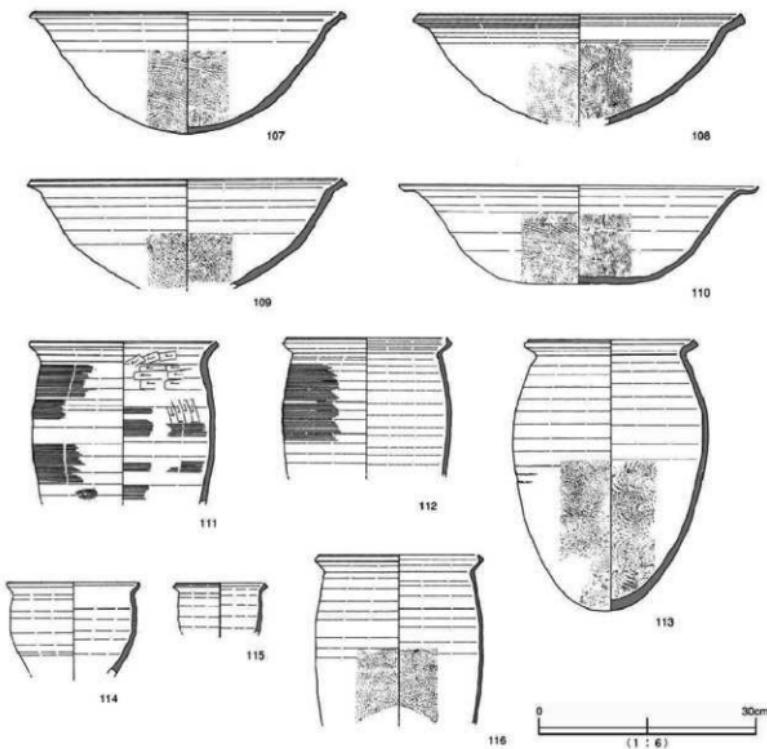
四点が実測でき掲載した。遺跡での鍋は赤焼土器で出土するのが通常であるが、本室跡では須恵器で出土している。鍋は水物の調理で使用されるが、硬い性質の鍋が焼成されている。内外面共に条線状のタタキ痕が施される。110は口縁は大きく外反し、口唇が急激に外に折れ曲がり、端部で立ち上がる。

甌 (第15図111~116)

長胴形を呈した土器 (111~113・116) で、外面にロクロ痕を示し、内面は青海波のアテ痕 (113) や、内面をヘラ状工具による削り痕を残す (111) 。116は口唇が急激にクの字状に内反している。114・115は、小型の變形土器である。全面にロクロ痕を示し、強い焼成である。



第14図 出土土器(三耳瓶・長頸壺)



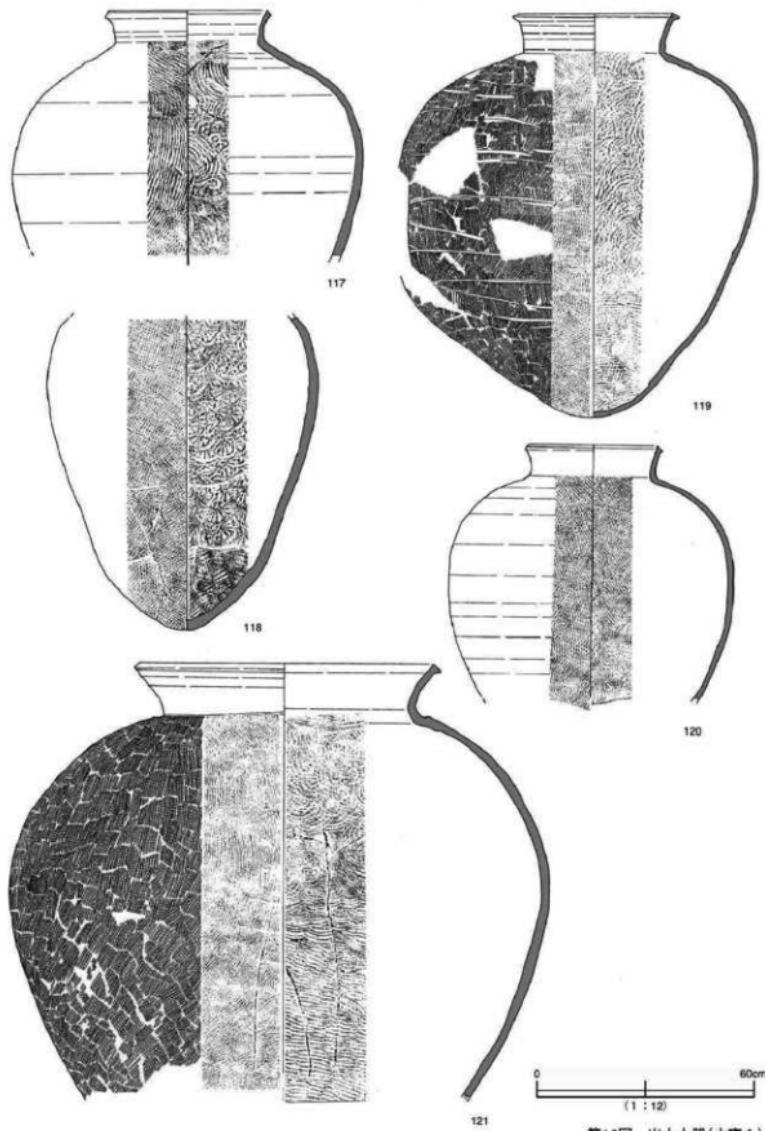
大壺（第16-17図・18図117～125）

大きな壺で、底部は尖底状になる。外面を条線状のタタキ面と、内面は青海波のアテ痕である。口縁部がやや、直立する（119・120）と、外反する117と121が観察される。土器製作事の容器と考える。

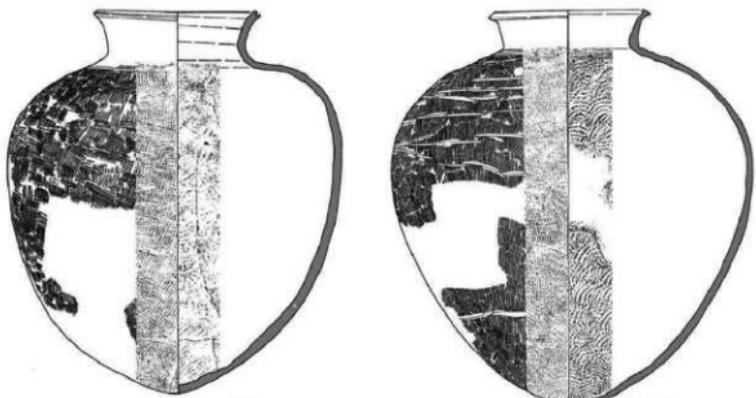
小壺（第18図126・127）

小壺は2点の出土である。ロクロ（127）と、ヘラ調整（126）の小壺であり、126は乾燥で器形が重になる。127は丁寧な製作である。底面は平坦となる。

第15図 出土土器（壺・壺）

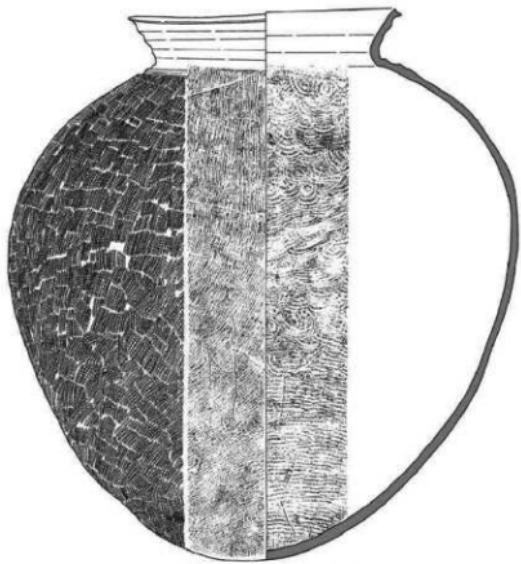


第16図 出土土器(大甕 1)

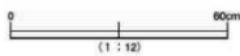


122

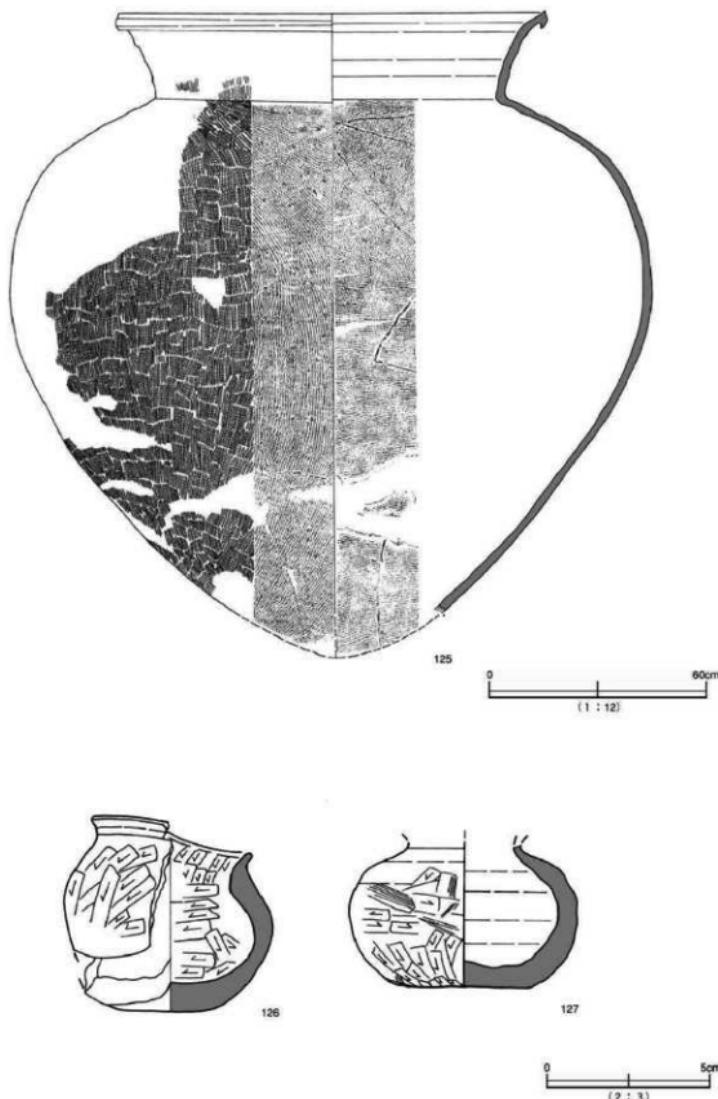
123



124



第17図 出土土器(大塚2)



第18図 出土土器(大壺3・小壺)

赤焼土器（第19図128～138）

土器は、小型の壺形土器である。底部が存在するものは128～130である。全面にロクロ整形痕を示し、形状は頸部でクの字状に折れ曲がり、口唇で立ち上がる。138は大型の壺である。長胴形を呈するものと推測できる。129外は底部の切り離しが回転糸切り離し（128・130）で、他は底部が復元できなかった。器の大きさは100cm前後の小さな壺である。これらはすべてが灰原の捨て場地区で確認されている。出土量が少なく、本窯での作成として判断する様子が認められない。窯からは酸化炎焼成の須恵器の出土のみである。129の底部切り離しは回転のヘラ状工具による切り離しと推測できるが拓本では明瞭な痕跡は確認できなかった。器形は底部から緩やかに立ち上がり、口縁部でクの字に外側に折れ曲がり、口唇で急激に立ち上がったり（130～133・135・137・138）、内側に折れ曲がったり（128・129・134・136）する形状が確認できる。

SK2土坑出土土器（第20図1～13）

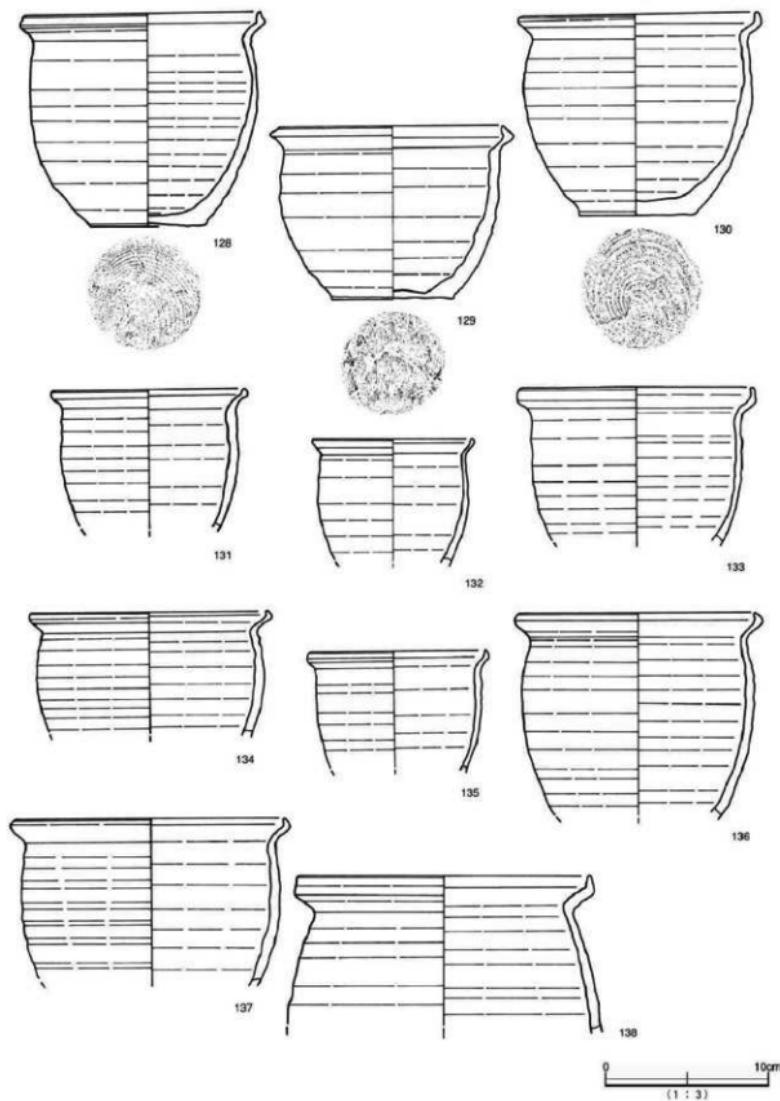
SK2土坑は本窯跡のすぐ左の東側で確認できたものである。平面形がやや円形となったもので、覆土からは13個の須恵器が、伏せられた状態で折り重なった形で出土した。土器の底部はすべて回転ヘラ切り離しで、工具の跡を明瞭に残すものが多く、取り上げのヘラ起こし痕を残す。形状は底部が水平となる（2・3・8・10～12）杯と、丸みをもって調整が少ない（1・4～7・9）が確認できる。口径は120cm前後、器高が34～38cmのはば同じ大きさの杯で、同時に埋設された感を受ける。第6図には検出状況の平面図と断面図が掲載されているが、その観察でも意図的な様相が窺われる。窯跡と一体になったものと考える。

土坑内からは、一括して出土している。底面が丸くなるものや、直線的になるものがある。埋め込まれていることから同時に設置されており、13点の出土である。すべてがロクロ整形を示し、回転痕や、ヘラ越し痕が観察される。埋設は瞬時であり、時期は同時代と考える。形状は体部が丸みを示す3・7・11・13である。外反する2・4～6・8・9、やや直立する1.10・12である。土坑は窯跡の西側で検出され、窯の設置したときの行事なのか、窯跡が焼成終了時に設置された土坑とも推測でき、出土遺物が造構の性格を提示していると考える。

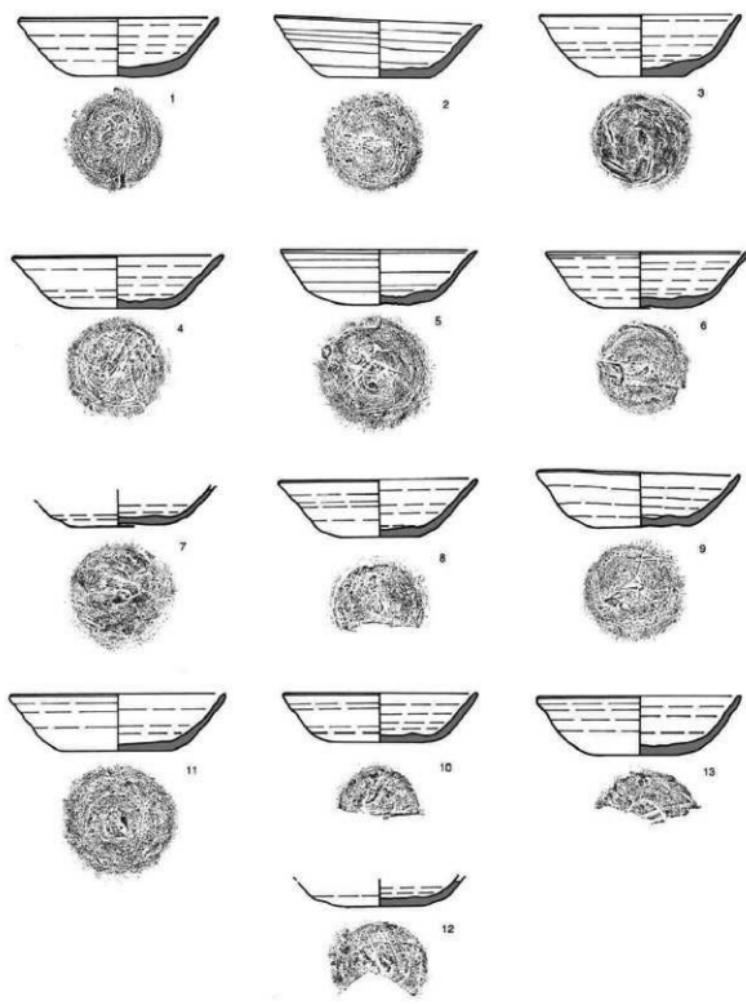
表5

測定箇所 番号	出土地点	格別	器種	寸法	剖面	測定・整備	底径 部	高さ	断面	測定・整備			記入 番号	備考
										外径	内径	底径		
I SK2 Y	須恵器	井	128	-	-	56 36 4 直腹	横	浅黄色	Hue 23Y 7.3	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	327	後台1-1
E SK2 Y	須恵器	井	129	-	-	60 38 2 直腹	横	浅黄色	Hue 23Y 7.3	ロクロ板	ロクロ板	回転ヘラ切	328	後台1-1 ヘラ起し痕
J SK2 F1	須恵器	井	124	-	-	56 39 4 直腹	横	12.4v-灰色	Hue 23Y 6.2	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	329	ヘラ起し痕
K SK2 F1	須恵器	井	124	-	-	60 35 5 直腹	横	浅黄色	Hue 23Y 7.3	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	330	後台1-1 ヘラ起し痕
S SK2 Y	須恵器	井	122	-	-	60 34 3 直腹	横	灰白色	Hue 3Y 7.2	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	331	後台1-1 ヘラ起し痕
E SK2 Y	須恵器	井	138	-	-	58 35 2 直腹	横	灰白色	Hue 23Y 8.1	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	332	後台1-1 ヘラ起し痕
T SK2 F1	須恵器	井	-	-	-	60 231 5 直腹	横	灰黄色	Hue 23Y 7.2	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	333	後台1-1 ヘラ起し痕
B SK2 F1	須恵器	井	122	-	-	32 30 4 直腹	横	灰黄色	Hue 23Y 6.2	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	334	ヘラ起し痕
Y SK2 Y	須恵器	井	125	-	-	60 34 2 直腹	横	灰白色	Hue 23Y 6.1	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	335	ヘラ起し痕
10 SK2 F1	須恵器	井	120	-	-	(26) 30 4 直腹	横	从属色	Hue 23Y 7.2	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	-	ヘラ起し痕
H SK2 F1	須恵器	井	123	-	-	70 35 4 直腹	横	浅黄色	Hue 23Y 7.4	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	-	ヘラ起し痕
D SK2 F1	須恵器	井	-	-	-	56 (12) 5 直腹	横	12.4v-黄色	Hue 10Y R 7.3	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	-	ヘラ起し痕
I SK2 Y	須恵器	井	126	-	-	60 35 5 直腹	横	12.4v-黄	Hue 23Y R 7.4	ロクロ板	ロクロ板	ヘラ切	-	-

出土物観察表(SK2)



第19図 出土土器(赤焼土器)



0 10cm
(1 : 3)

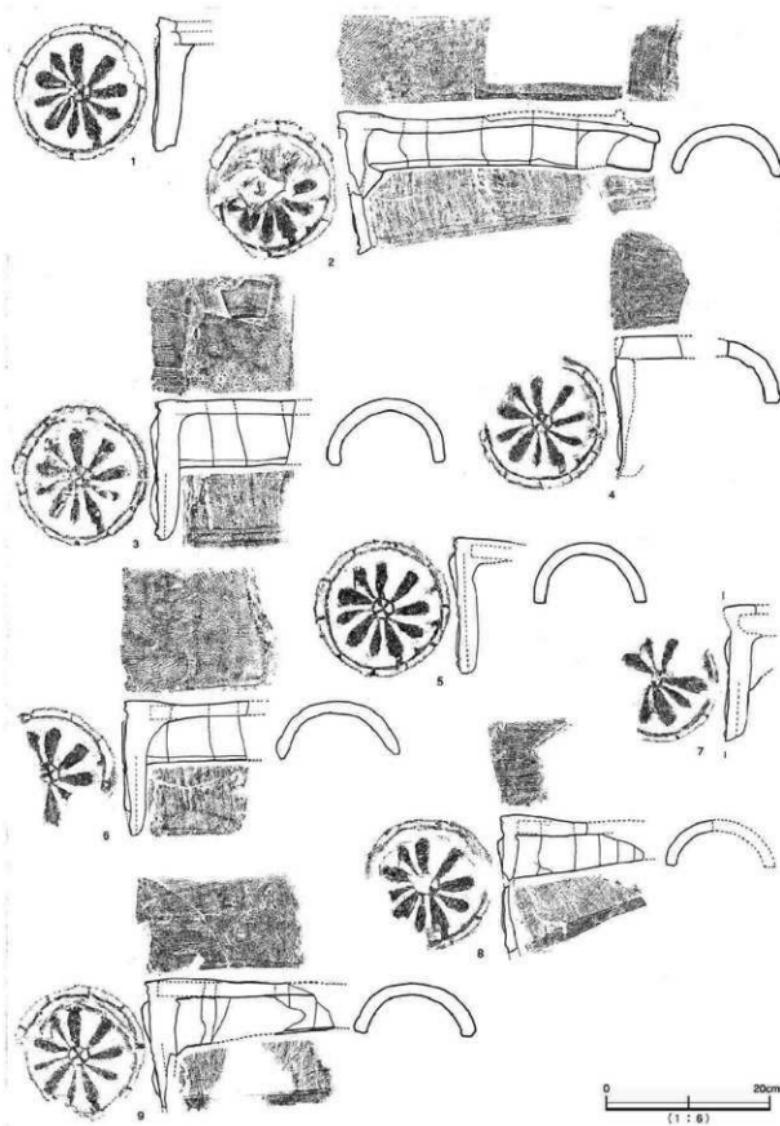
第20図 SK2土塙出土土器

出土瓦（第21図1～第30図63）

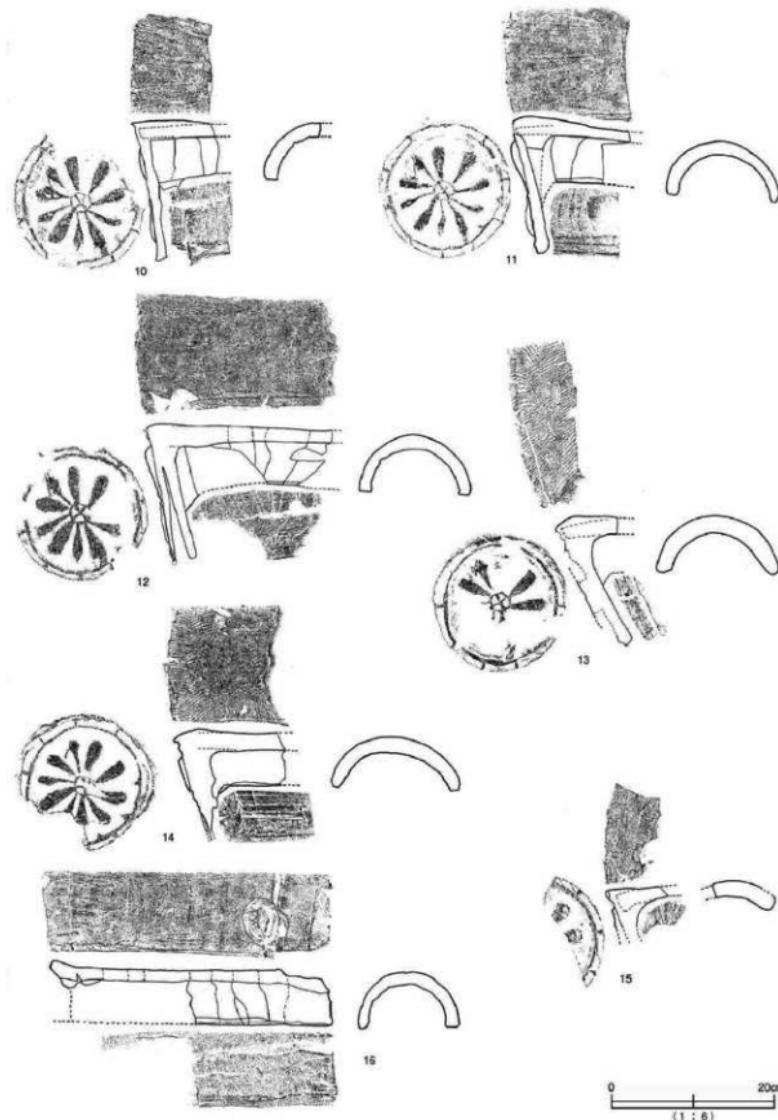
瓦は軒丸瓦、丸瓦、平瓦の三種類が出土した。軒丸瓦の出土数は8箱、丸瓦は18箱、平瓦は184箱である。総数210箱を数え、今次の窯跡の調査で出土した遺物の総数からは約三分の一程度である。瓦以外では、生活什器の須恵器の杯、甕、壺、鍋等である。本來、本窯跡は瓦を焼成することで構築されたものと考える。ここでは出土瓦について種別ごとに説明する。

軒丸瓦（第21～23図1～25）からは、図化出来た資料は、24点である。第21図の1は酒田市本楯に所在する城輪櫻跡の正方形から、28mほど東側の溝跡付近の土坑から出土したとのことで、市職員から許可を得て拓本、実測、写真を掲載した。出土軒丸瓦の中で全長を復元できたのは第21図2の軒丸瓦である。しかし、丸瓦の表面が焼成時に弾け、拓本では空白が見える。全長349mm、高さ68mm、幅140mmである。瓦当面の径は168mm～173mmを計り、瓦当面の範型は単弁の十弁蓮華文である。弁は太いものや、細いものがみえる。中心には円形の四区分されている。また、瓦当を観察すると、丸瓦の中心が天となり、四区分された円を中心にして弁が放射状に配置される。弁の頂点に範の傷が見えるものや、頂点がへらで整形されるもの、瓦当の弁の下部は外区に弁を止める緊きの部分が見え、範型には故意に彫り残している。また、頂部の弁には弁と弁の間に片方からの彫り残しが続く。弁の規模や、配置が城輪櫻跡出土の軒丸瓦と同一であることが観察される。外輪区画は10区分されている。

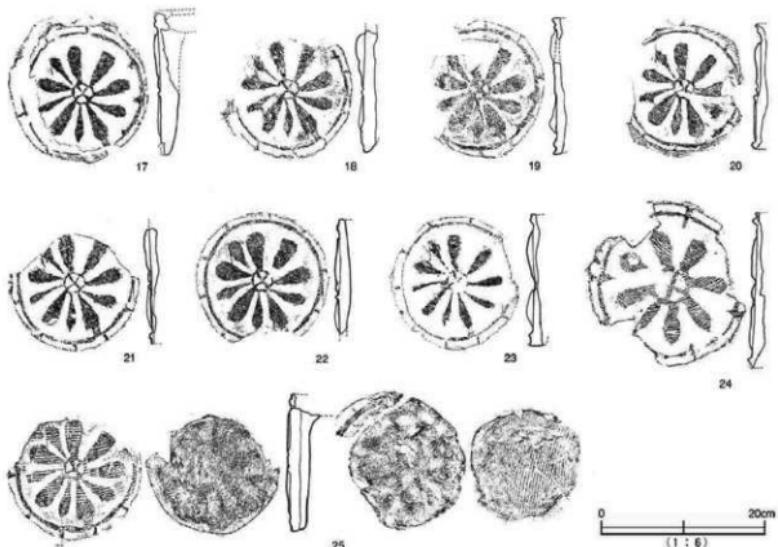
丸瓦（第24図～26図26～47）の中で全長が測れるものは5点（26～29・33）ある。全長398mm、高さ75mm、幅148mmである。形状は広端面と狭短面ではやや短冊状になり、厚さ15mmである。製作は丸太に帯状の粘土を範に巻き付け、表面を繩目のかタキで縛めている。内面には、取り上げでの紐状の痕跡が残るものがある（26）。玉縁部は一回り小さくし、ほかの丸瓦と重ねられるようになる。玉縁は長さ41mm、厚さ15mm、玉縁幅110mmを計る。灰をかぶる瓦もあり、焼成時の問題である。



第21図 出土瓦(軒丸瓦(↑))



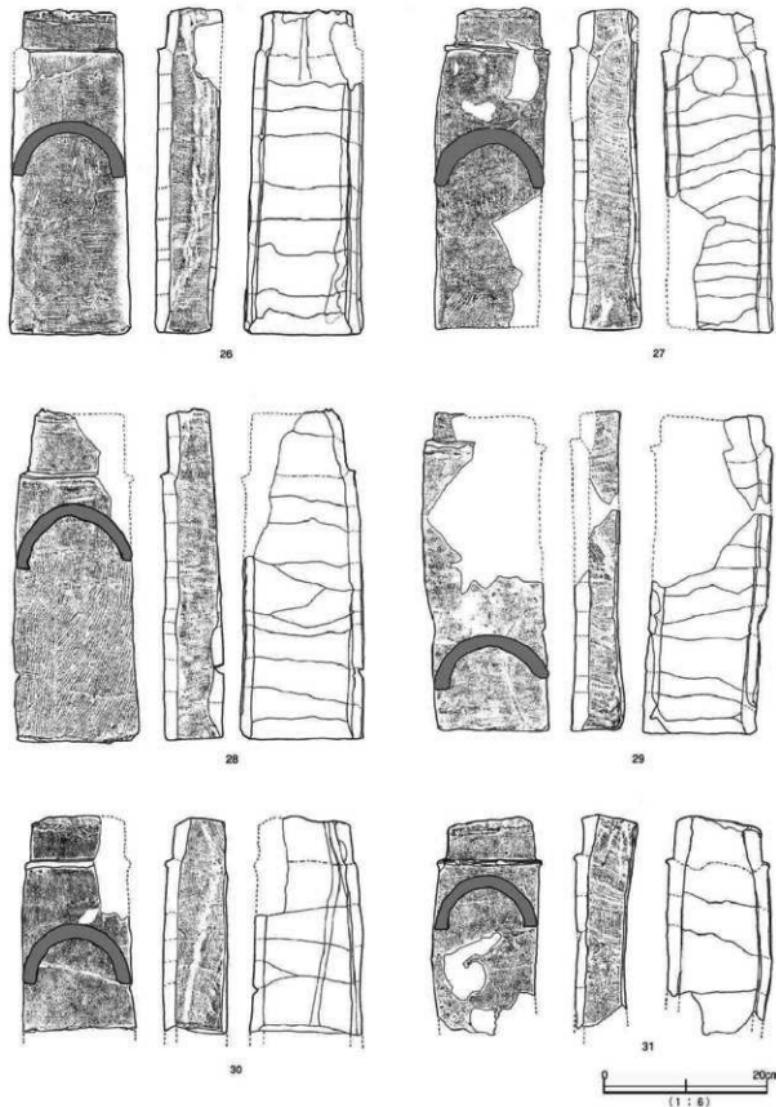
第22図 出土瓦(軒丸瓦(2))



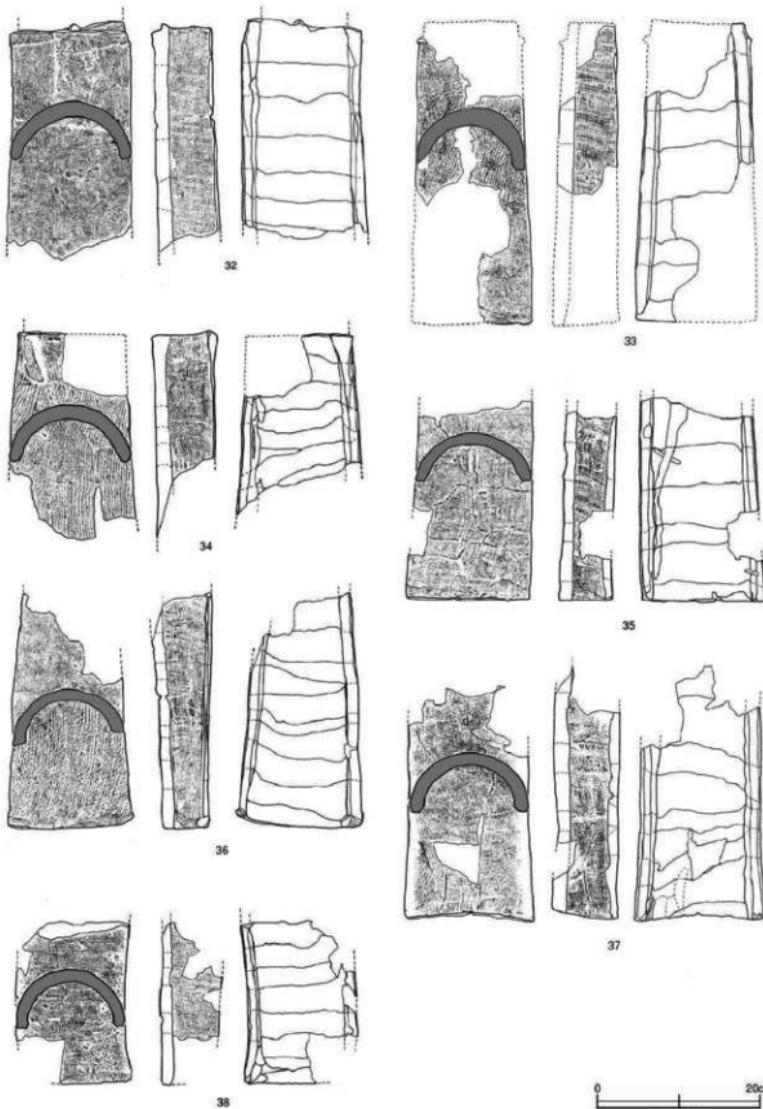
第23図 出土瓦(軒丸瓦頭面)

平瓦（第27図～30図）は、破片となっていたが、復元で多くの平瓦が掲載できた。丸瓦と同様で、広端面が広く、狭端部では、やや狭く、瓦を並べる際に丁寧な配置が出来るようになっている。規模は、全長405mm～430mm、高さ48mm～74mm、厚さ22mm～33mmである。形状は他の瓦と同様で、広い端部とやや狭い端部を持つ。成形では凸面に繩目タタキ後、布撫でが施される。端部の成形では、面を削るものや、撫でるだけのものがある。凹面は、布目アテ痕や、繩目のタタキが観察される。作製は、瓦より一回り大きな作製台に粘土板をのせ、凹面には板材やヘラで調整している。凸面は繩目のタタキ痕や、たたき後に布撫でが施される。中心付近には作製台に粘土を固定する木棒部の先端が瓦の粘土に、長辺35mm、短辺30mmの長方形した深さ1～2mmの痕跡が両側2箇所に存在する。粘土の整形でタタキや、撫でを抑える役目となっている。

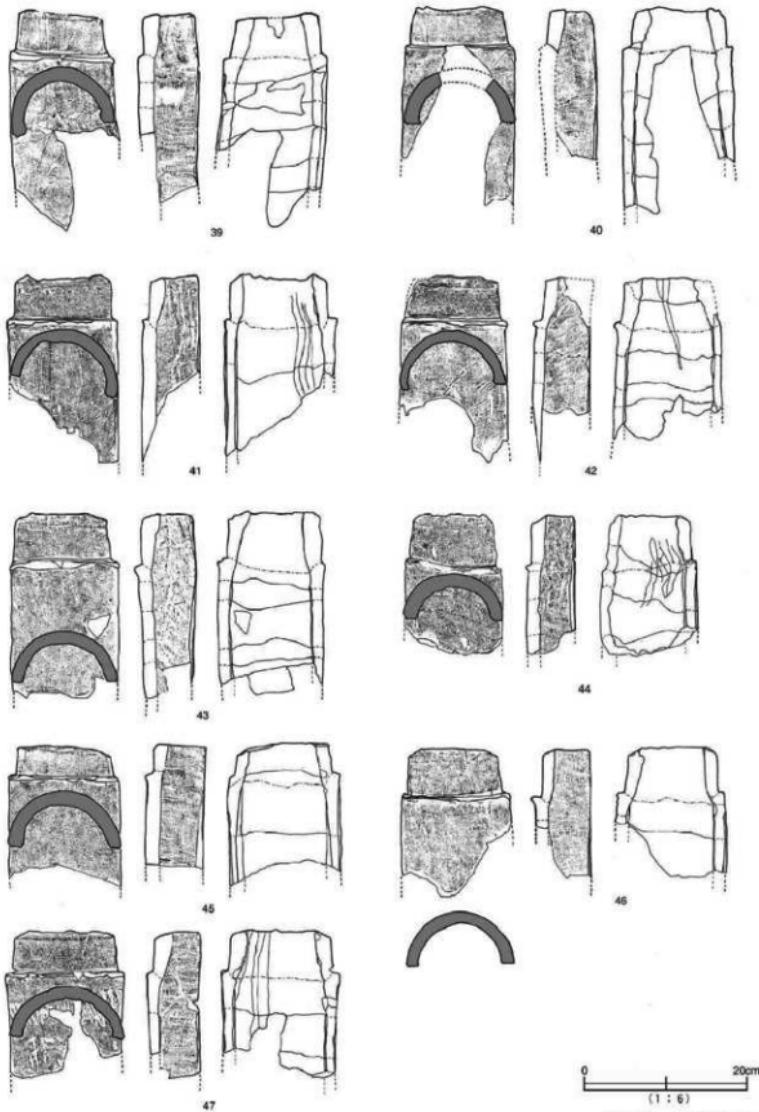
瓦は、端部を広くしたり、片端を狭くする作製で、片方の瓦に重ねられることや、積み重ねられるように工夫を施している。瓦については一つの窯跡からの一括で出土し、作製工人の存在や、平野部への供給に今後の課題が提出された。



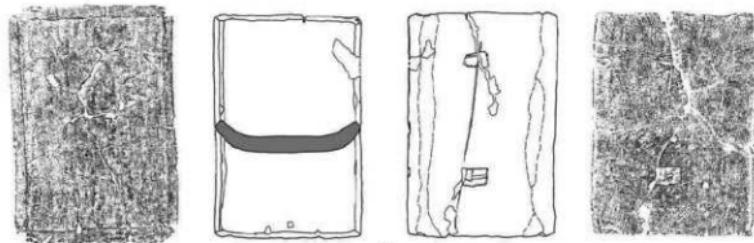
第24図 出土瓦(丸瓦)



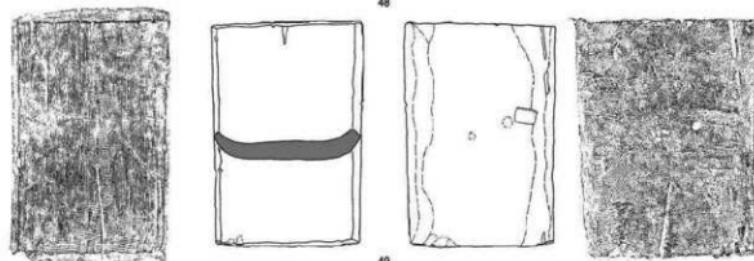
第25図 出土瓦(丸瓦)



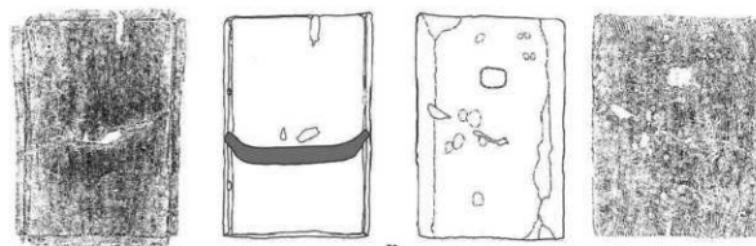
第26図 出土瓦(丸瓦)



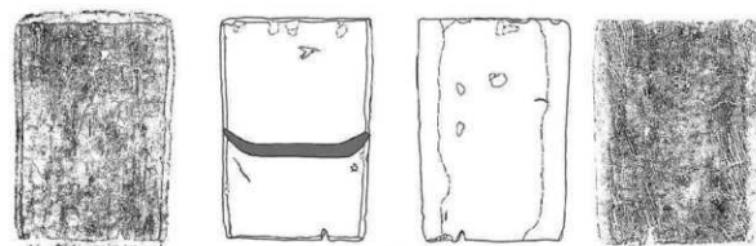
48



49



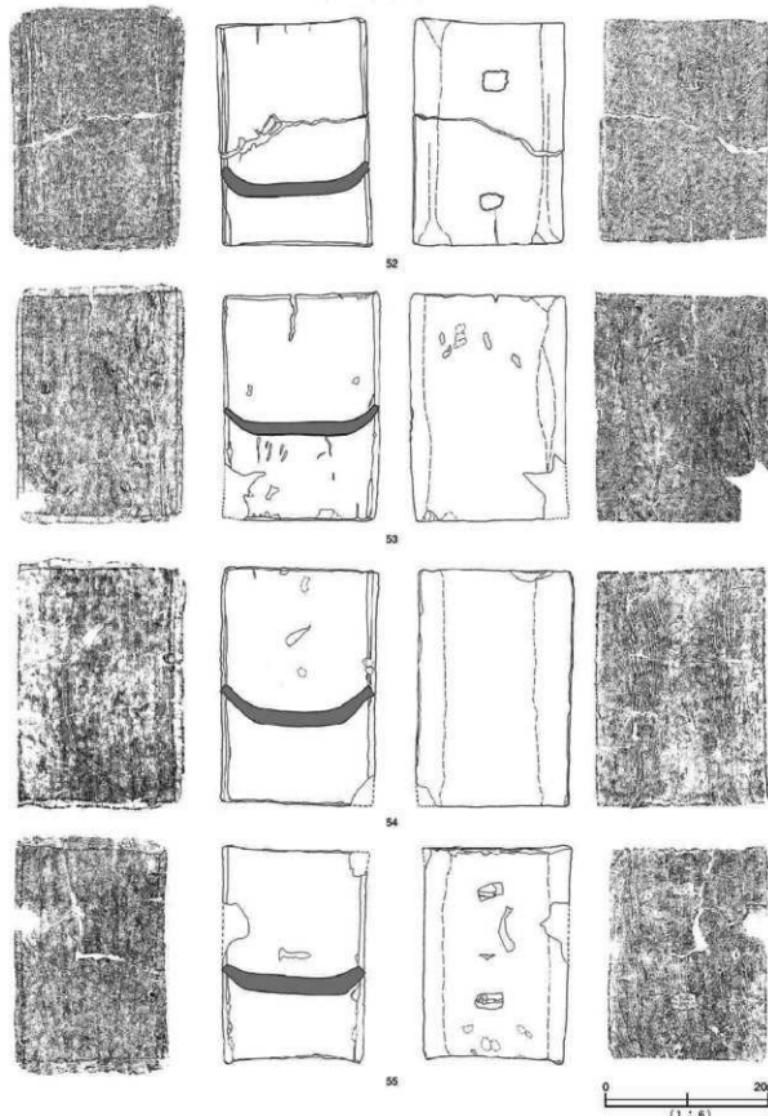
50



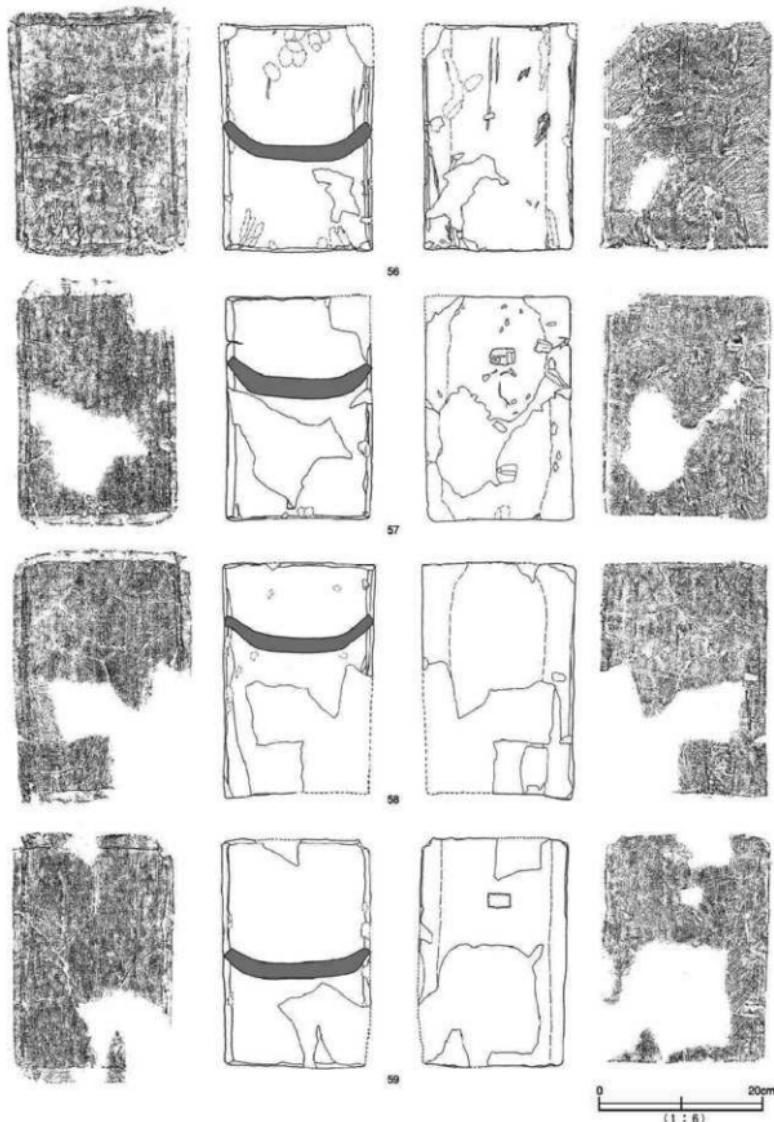
51



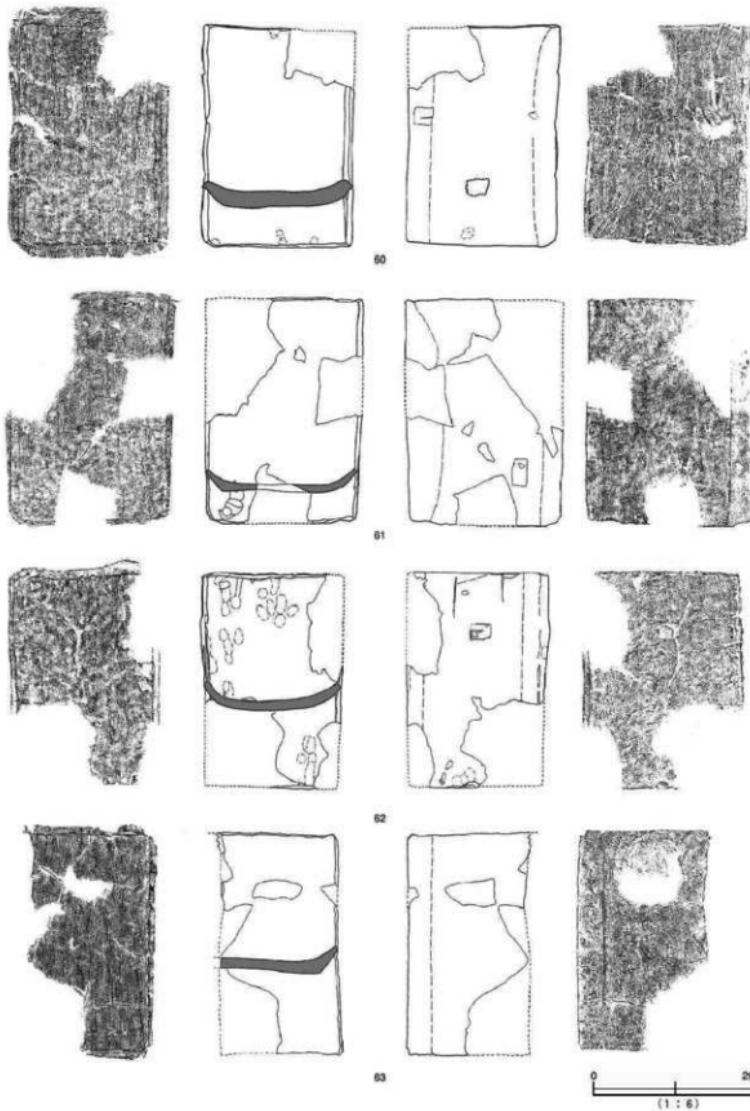
第27図 出土瓦(平瓦)



第28図 出土瓦(平瓦)



第29図 出土瓦(平瓦)



第30図 出土瓦(平瓦)

表8

測量点番号	出土地点	計測値					測定			備考	
		全長	高	厚	左側面	右側面	底面	底面	底面		
56	SQI-Square I R-13 II SQI-Square I S-14 II S-13 II	415	73	25	C415 a 11 13 -	-	歯土 壓成 板-縫 有目テ 細目テ	凸面	凸面	西面	無目あり
	右側面 C412 a 10 8 14 底面部 C271 c 10 - 6				歯目 底面	底面	有目テ	底面	底面	西面	無目あり
57	4-14 II	422	71	32	C267 c 13 - 8	-	色調	Hue 72Y7.2	△	西面	無目あり
	左側面部 C296 b 13 <6> - 右側面 C401 a 13 2 5 底面部 C287 d 23 -				歯土 壓成 板-縫 有目テ	凸面	凸面	底面	底面	西面	無目あり
58	4-19 II	422	75	17	C290 d 20 -	-	色調	Hue 25Y7.3	△	凸面	無目あり
	左側面部 C290 b 20 4 - 右側面 C403 b 18 5 - 底面部 C280 d 19 -				歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	凸面	底面	底面	底面	西面	無目あり
59	5-13 II	416	79	27	C284 d 20 -	-	色調	Hue 5Y7.1	△	凸面	無目あり
	右側面部 C414 b 22 3 - 右側面部 C414 d 13 - 底面部 C272 d 23 -				歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	凸面	底面	底面	底面	西面	無目あり
60	0-19 II	401	56	26	C286 b 14 11 -	-	色調	Hue 25Y7.2	△	凸面	無目あり
	右側面部 C286 d 16 11 - 底面部 C280 d 32 -				歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	底面	底面	底面	底面	西面	無目あり
61	5-12 II	413	43	13	C405 d 17 -	-	歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	凸面	凸面	西面	無目あり
	右側面部 C405 d 17 - 右側面部 C407 d 7 - 底面部 C285 d 15 -				歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	底面	底面	底面	底面	西面	無目あり
62	5-14 II	405	51	18	C292 b 9 20 -	-	歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	Hue 5Y 6.1	△	凸面	無目あり
	右側面部 C292 b 9 20 - 右側面部 C384 a 9 2 21 底面部 C288 c 15 -				歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	底面	底面	底面	底面	西面	無目あり
63	5-13 II	408	51	19	C285 d 15 -	-	色調	Hue 25Y7.3	△	凸面	無目あり
	左側面部 C285 d 15 - 右側面部 C385 d 12 - 底面部 C288 d 13 -				歯土 壓成 板-縫 歯目 底面	底面	底面	底面	底面	西面	無目あり
	5-11 II				C163 d 10 -	-	色調	Hue 5Y 6.1	△	凸面	無目あり

出土遺物観察表(平瓦)

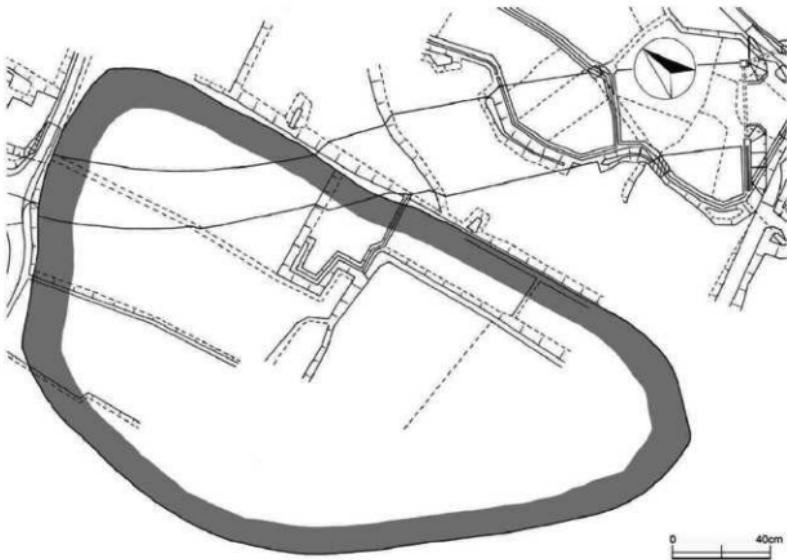
VI 坂ノ下遺跡

遺構と遺物の分布

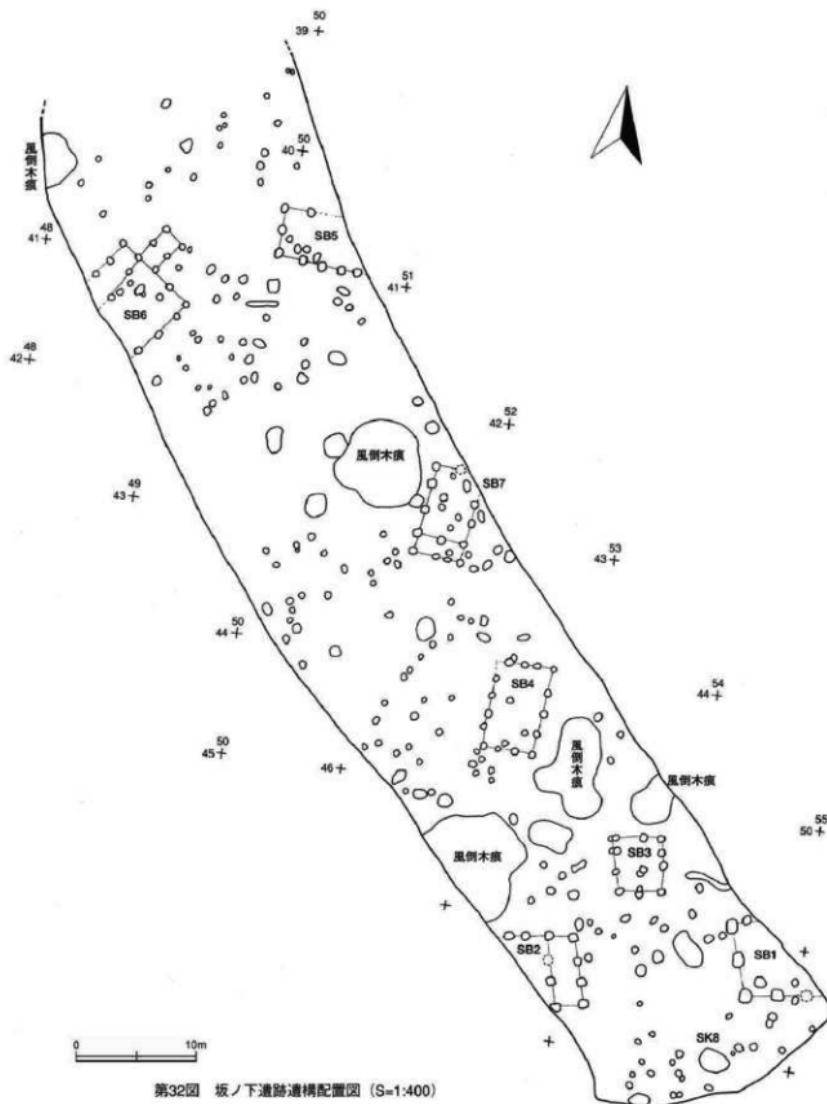
調査では当初、重機械によって表土の除去と手掘りによる面整理を実施した。遺跡詳細分布調査での資料では事業区の部分に土器片の散布が認められ、トレンチと、試掘ピットを設定し遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果、鷹尾山から延びる小段丘に立地する集落跡として認定された。遺跡の規模は東西60m、南北120mの範囲である。トレンチの面整理では土器片や、遺構と考えられる落ち込みが確認され、小段丘上に広がる。掘立柱建物跡の柱痕が多数検出され、建物跡として組み合わされるものと考えられる。遺物は須恵器の杯片や、壺片、内黒土器の杯片、碗片、縄文時代の石器が出土した。整理箱にして4箱である。

掘立柱建物跡（第31図）

建物跡は7棟が組み合わさった。二間×三間の身舎と、三間×四間の身舎をもつ建物跡が多い。柱間は2.1mから2.4mを測り、7尺ないし8尺等間である。SB4建物跡は三間、四間の規模が大きい建物で、遺跡の中心になるものと考える。建物跡はほぼ東西や、南北に並び、存在は時期の違いに認められる。また、SB6建物跡は身舎に一間、二間の規模で続き、建物が一体となる。

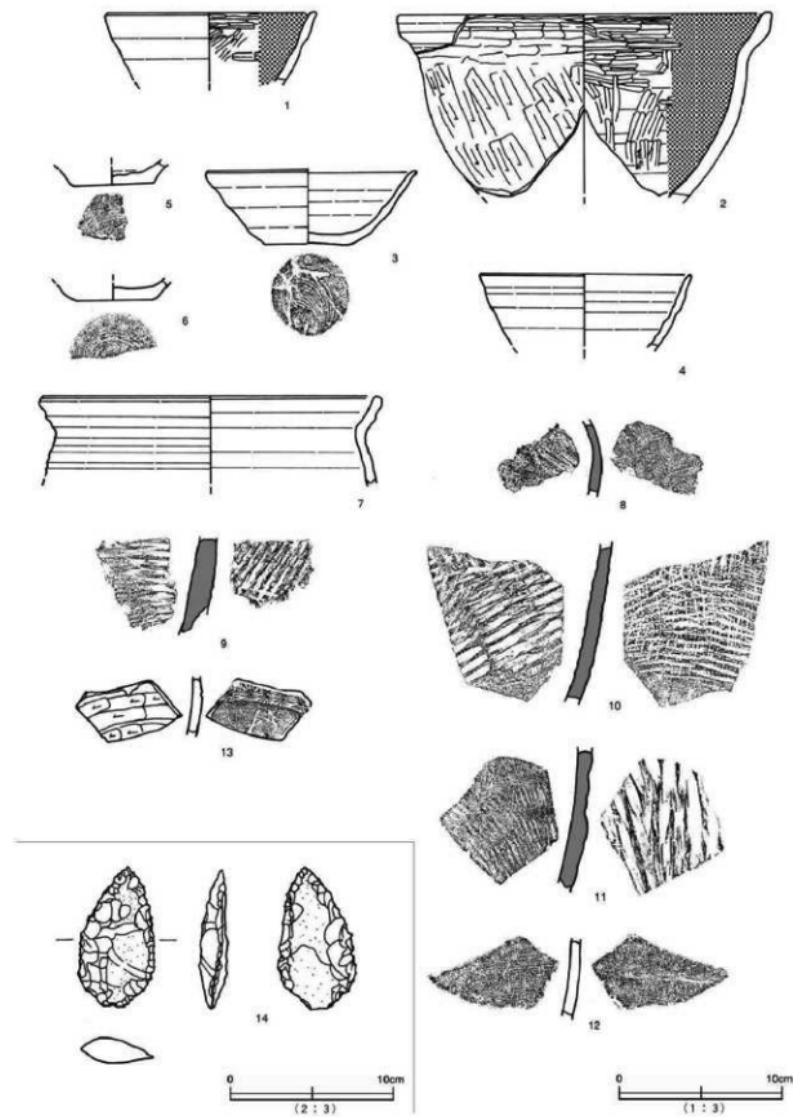


第31図 坂ノ下遺跡概要図



第32図 板ノ下遺跡遺構配置図 (S=1:400)

第32図 板ノ下遺跡遺構配置図



第33図 坂ノ下遺跡出土遺物

その他の遺構

建物跡の周囲には風倒木痕と推定される大きな落ち込みが確認されている。建物の傍で確認され、集落と一緒にした感を受ける。中心に地山の土砂が充満し、風で倒れた方向が明瞭に分かることで、風倒木痕としたものである。

出土遺物（第33図）

遺物は4箱の総量であるが、遺構の時期を確定する貴重な資料である。1は内黒土器で、破片であるが内面をヘラ状工具で丁寧に磨き、器面に炭素を吸着させ、黒色化を施している。2も同様であるが、器形は碗である。内面は同様であり、外面に口縁部は横位に、体部下半は縦位にヘラ状工具で磨き、整形している。3~6は赤焼土器の杯形土器である。底部の切り離しは回転糸切り離しで、器面にロクロ痕を明瞭に残す。7は赤焼土器の壺形土器である。長胴形を呈するものと思われる。口縁部のみの出土であるが、体部から頸部にかけてはクの字状に外反し、口縁は丸くなり、口唇となる。8~11は須恵器の壺形土器片である。外面を条線状のタタキ痕を示し、内面にも条線状のアテ痕が施される。12は赤焼土器の壺片である。外面にハケメ痕を残している。13は中世陶器片である。ヘラ状工具による削り痕が観察され、菊花の刻印がある。14は面整理で出土した縄文時代の石器である。周囲に押圧剥離面が施され、鋭利な形状を示す。

表9

測量點 番号	出土地点	種別	基準	計測値					新土	焼成	色調	測定・参考			N.P. 番号	備考
				上寸	下寸	幅	側厚	底厚				外面	内面	地底		
1	1 内黒土器	碗	手	(100)	-	-	-	(4)	4	粗砂泥	良	褐色 Hue 73YR 7/6	ロクロ板	0100E-12#	-	
2	1 内黒土器	碗	手	(200)	-	-	-	(112)	8	粗砂泥	良	褐色 Hue 73YR 6/6	ロクロ板 側身-12#	0100E-12#		
3	1 必做土器	杯	手	(100)	-	-	50	47	4	粗砂泥	良	にぶい褐色 Hue 73YR 6/4	ロクロ板	ロクロ板	回転糸切	
4	X-0 必做土器	杯	手	(100)	-	-	-	(6)	3	粗砂泥	良	褐色 Hue 73YR 6/6	ロクロ板	ロクロ板	回転糸切	
5	I 必做土器	杯	手	-	-	-	(50)	(12)	5	粗砂泥	良	褐色 Hue 73YR 7/6	ロクロ板	ロクロ板	回転糸切	
6	I 必做土器	杯	手	-	-	-	(50)	(11)	5	粗砂泥	良	にぶい褐色 Hue 73YR 7/4	ロクロ板	ロクロ板	回転糸切	
7	I 必做土器	壺	(200)(176)	-	-	(32)	5	粗砂泥	良	明黄褐色 Hue 10YR 7/4	ロクロ板	ロクロ板				
8	X-0 素燒器	壺	手	-	-	-	-	5	粗砂泥	良	褐色 Hue 5Y 5/1	ロクロ板	ロクロ板			
9	X-0 素燒器	壺	手	-	-	-	-	13	粗砂泥	良	褐色 Hue 7.5 YR 1/1	タタキ	タタキ			
10	X-0 素燒器	壺	手	-	-	-	-	9	粗砂泥	良	にぶい褐色 Hue 10YR 6/4	タタキ	タタキ			
11	X-0 素燒器	壺	手	-	-	-	-	8	粗砂泥	良	褐色 Hue 9YR 6/6	タタキ	タタキ			
12	1 土器	壺	手	-	-	-	-	6	粗砂泥	良	にぶい褐色 Hue 73YR 7/4	ハサ目	ハサ目			
13	I 瓦器	コソロ	-	-	-	-	-	5	粗砂泥	良	黑色 Hue 25Y 2/1	1ガキ	1ガキ	外側 喜和文 黑色化處理		
(右器)				最大長				最大幅				最大厚				
14		石器	石頭	43	24	8										0 40cm

坂ノ下遺跡出土遺物観察表

VII 考察

調査は平成13年度に実施された広域営農団地農道整備事業（飽海中央地区）に伴う緊急発掘調査である。ここでは、泉森窯跡と、坂ノ下遺跡の調査成果のまとめを記述する。

泉森窯跡

窯跡の造営方法が北側に焚き口を持ち、北西からの風が流入しやすい方法を示す。また、丘陵斜面に一基のみの窯である。採掘される粘土の量によるものかもしれないが、ほかに窯の存在が無かった。丘陵斜面には窯跡と斜面で確認されなかった丘陵の切れ目に沢筋が確認され、この沢筋を利用して、低いうる窯での焼き損じた製品を投げ捨てていた。窯の周囲や灰原部分には多くの土器片が確認された。とくに、灰原の下面では瓦の破片が多く出土し、窯の最初の操業で瓦が焼成されたものと考える。その後、丘陵の西に広がる庄内平野に存在する平安時代の集落跡に生活什器として供給された土器と考える。また、工人が使う什器のほか、土器や粘土を運ぶ入れ物も窯で焼成されたものと考える。

窯や、灰原からは須恵器の壺、杯、甕等の製品が出土し、平安時代の国府と推測される城輪横跡に製品や、瓦を供給したものと考える。周辺には、顧瀬山古窯跡や泉谷地古窯跡、山盾古窯跡等、多くの窯跡が確認されている。庄内東部古窯跡群として平安時代の研究材料となり、本窯跡も貴重な資料を提出した。特に軒丸瓦では、瓦当面の様相が、城輪横跡で出土した軒丸瓦と同範になり、泉森窯跡で焼成された瓦が同一であり、時期の確認が認められる。時期は同時に出土した土器の編年から9世紀第一四半期に想定される。

坂ノ下遺跡

調査での成果では、掘立柱建物跡が7棟検出され、その分布状況から泉森窯跡で作業をした工人の住居と推定される。

坂ノ下遺跡の掘立柱建物跡から出土した遺物の時期は、土師器や赤焼土器の特徴から平安時代初め、9世紀中頃と考えられる。先に述べた泉森窯跡の9世紀第一四半期よりは時期はやや遅れるが、坂ノ下遺跡の範囲は、農道の路線外、特に東側に大きく広がるものと思われる。今後の調査によっては、泉森窯跡と同じ時期の建物跡の存在が十分考えられる。

山形県内で須恵器の窯跡と工人の工房、居住区域が一体的に把握される資料は珍しく、さらに出羽国府とされる城輪横跡の関連も窺える貴重な遺跡である。

参考文献

- 水戸部秀樹・須藤英之 2003 西村山地域史研究 第21号
柏倉亮吉・伊藤 忍 1970 平野山古窯跡群 寒河江市教育委員会

その他多くの研究者に報告の示唆をえていただいた。記して感謝を述べるところであるが、省略させていただいた。無礼を深謝します。

写真図版



調査説明会



SQ1 完掘



SQ1 断面設置状況



SQ1 完掘状況（焚口部から）



SQ1 燃焼部断面



SQ1 宪掘



SQ1 灰原遺物出土状況



重機による表土除去



調査区域環境整備作業



調査区域環境整備作業



調査グリッド設定



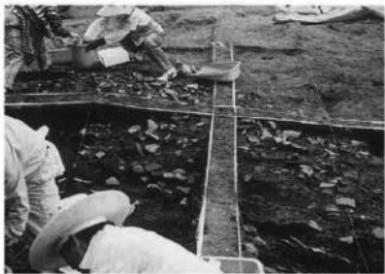
灰原調査風景



灰原調査風景



灰原調査風景



灰原調査風景



SQ1 燃燒部断面



SQ1 燃焼部断面



SQ1 焼成部断面



SQ1 燃焼部断面



灰原土器出土状況



炊口部土器出土状況



RP193 大甕出土状況



SK2 土搗土器出土状況



SQ1 土器出土状况全景（最下层）



SQ1 燃烧部土器出土状况



SQ1 烧成部(中位)土器出土状况



SQ1 烧成(上位)土器出土状况



SQ1 最下層出土状況（煙道部より）



SQ1 底面断面切断状況



SQ1 最下層完掘状況



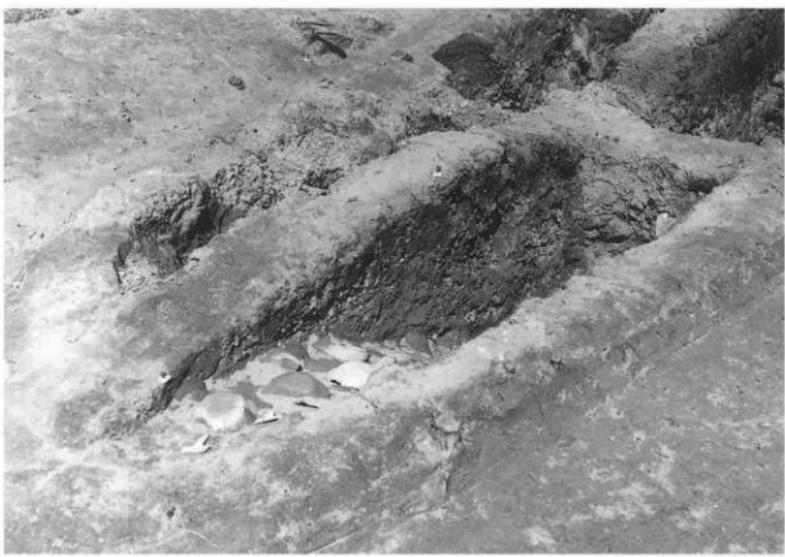
SQ1 最下部遺物出土状況全景



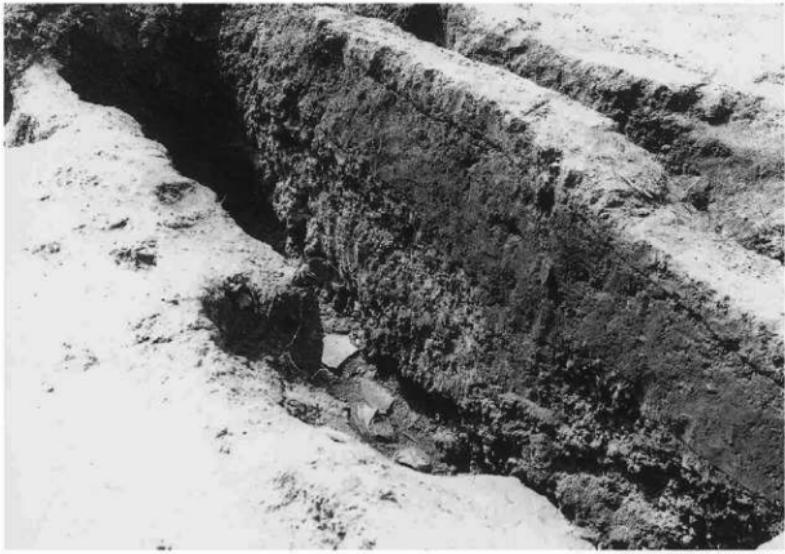
SQ1 燒成部断面



SQ1 燃焼部断面



SQ1 上半部南北土層断面



SQ1 下半部南北土層断面



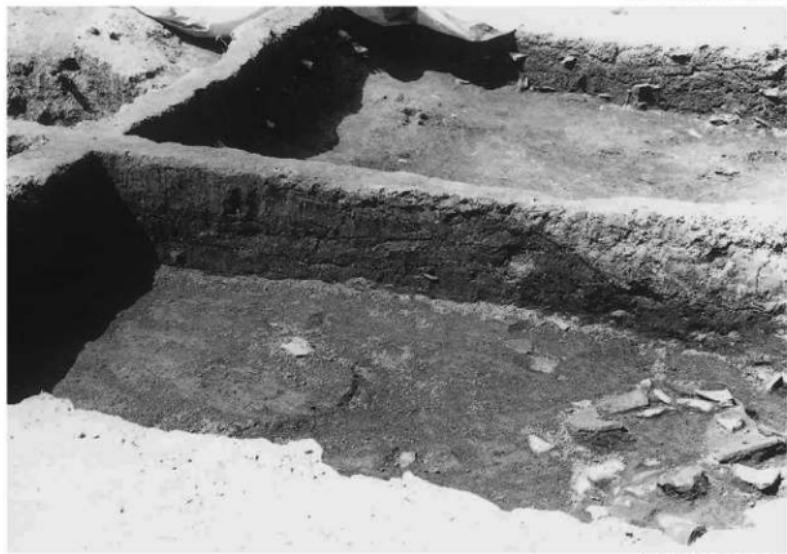
SQ1 壁面断ち割り（上半部）



SQ1 壁面断ち割り（下半部）



SQ1 焚口部南北土層断面



SQ1 灰原南北土層断面



SQ1 灰原土層断面（西側）



SQ1 灰原土層断面（東側）



SQ1 主軸断面測図作業



焼成部遺物出土状況



大甕出土状況



灰原遺物出土状況



軒丸瓦出土状況



軒丸瓦出土状況



SK2 土埴土器出土状況



調査説明会風景







55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84

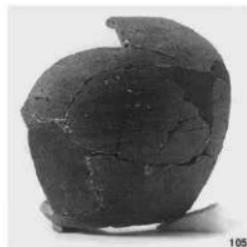
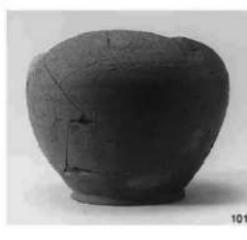
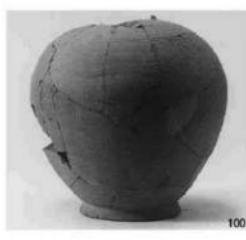


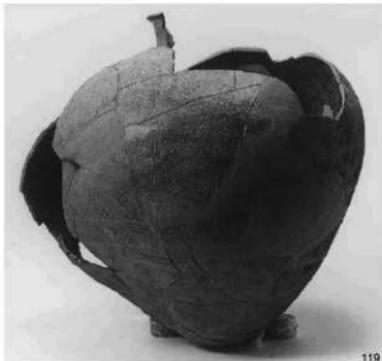
85



86









121



122



123



126



127



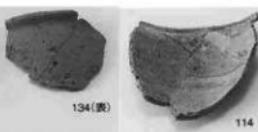
124



125



131



114

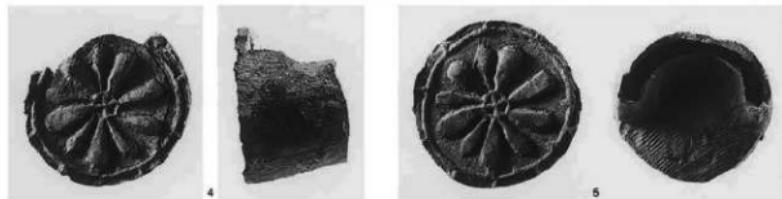
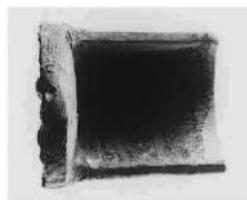
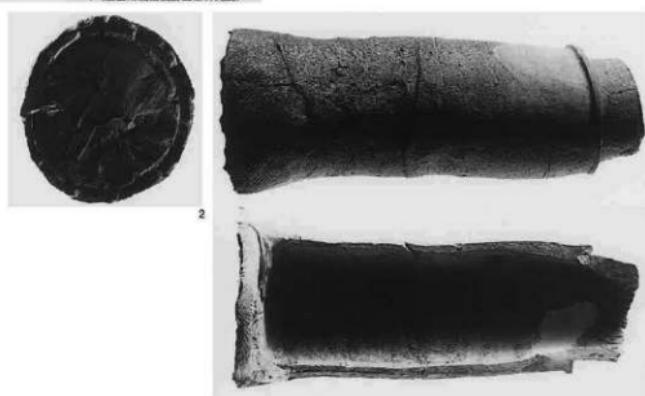


134 (裏)

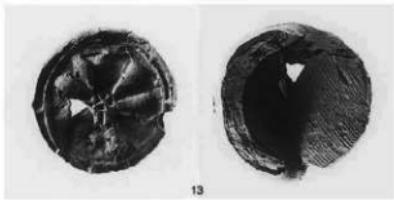
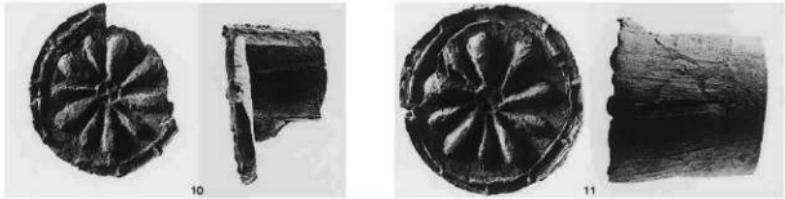
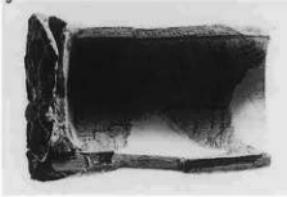
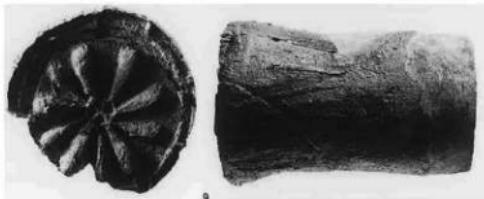
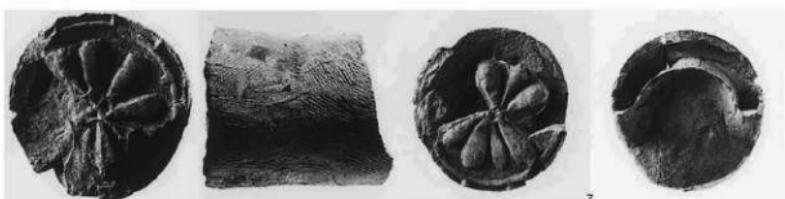


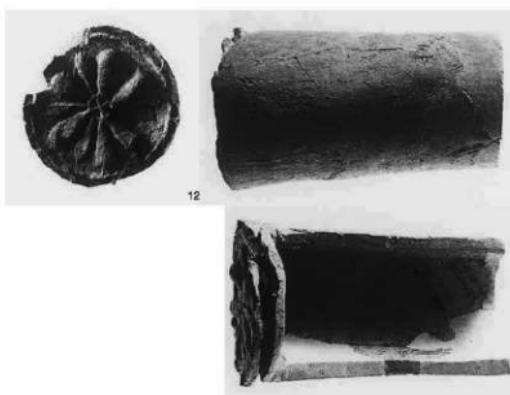


SK2 土拭 一括出土土器

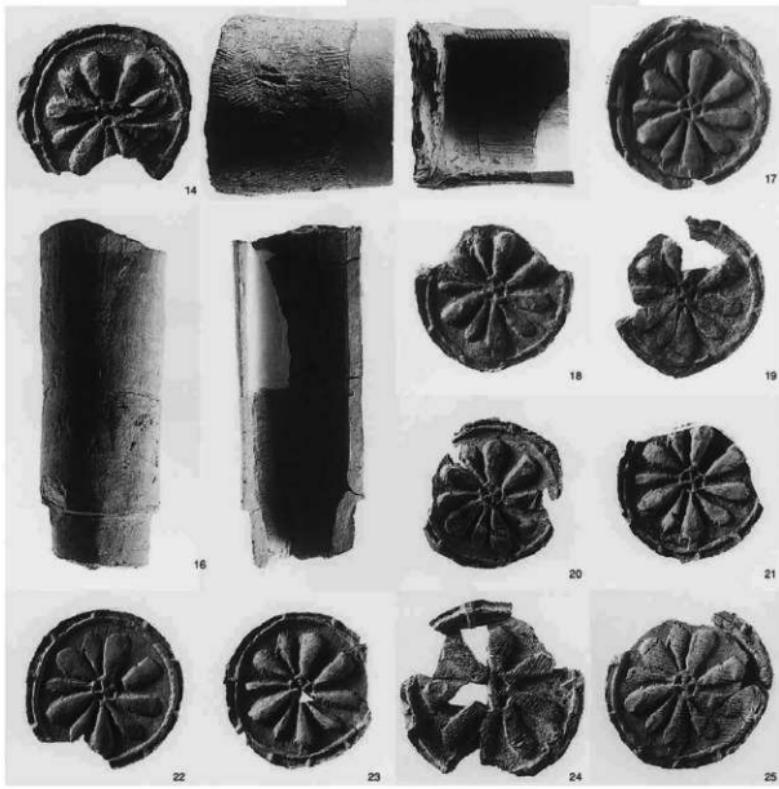


5





12



14

17

18

19

16

20

21

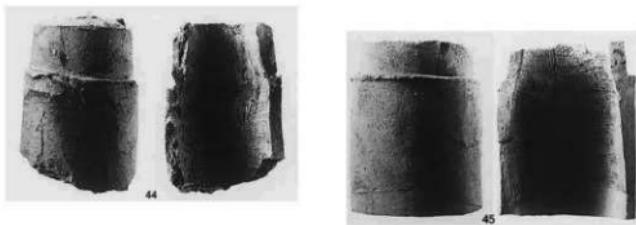
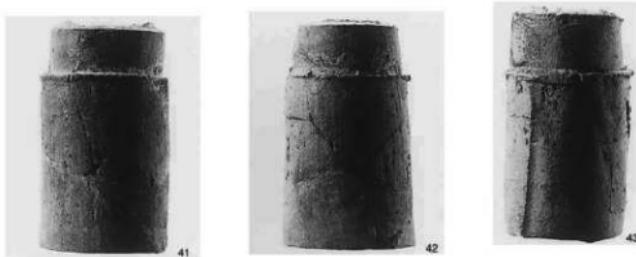
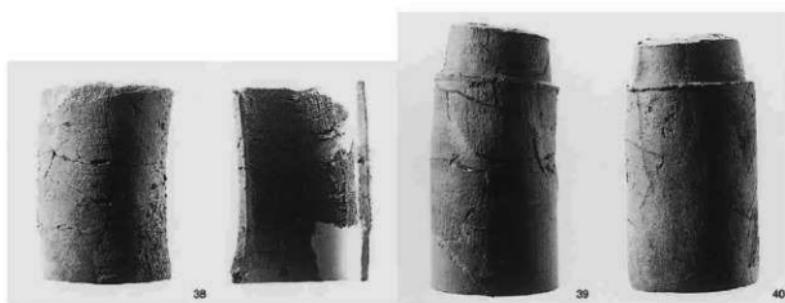
22

23

24

25







48



49



49



49



50



1



1



1



52



1



1



1



54



1



四

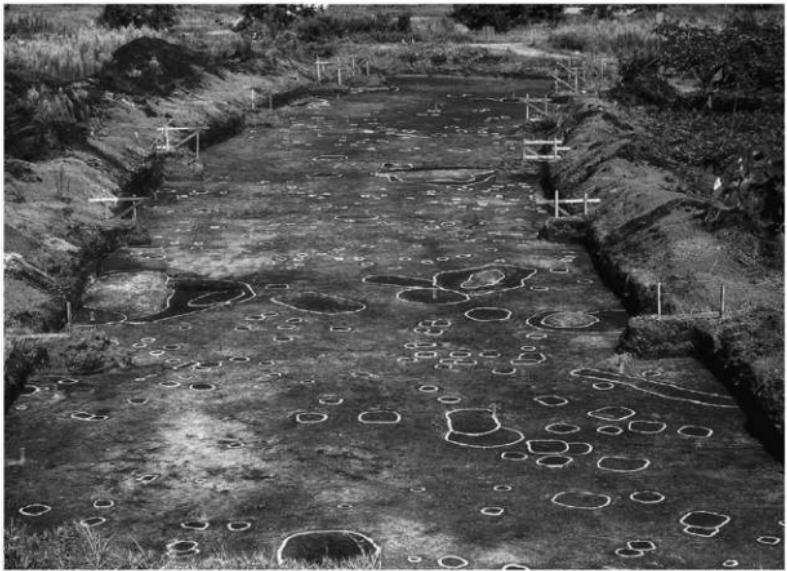


写真図版28





坂ノ下全景



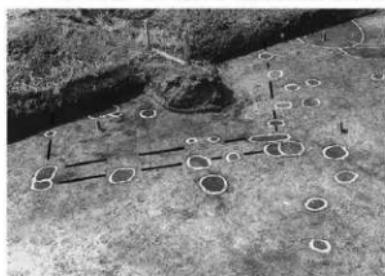
遺構検出状況



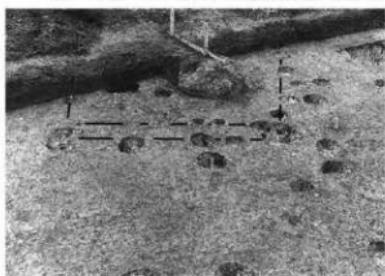
坂ノ下遺跡・SB1 挖立柱建物跡検出状況（西から）



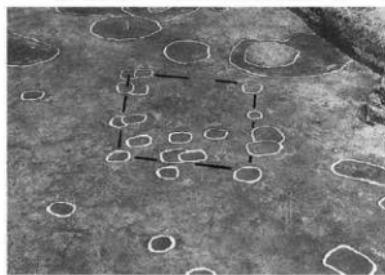
坂ノ下遺跡・SB1 挖立柱建物跡完掘状況（西から）



坂ノ下遺跡・SB2 挖立柱建物跡検出状況（東から）



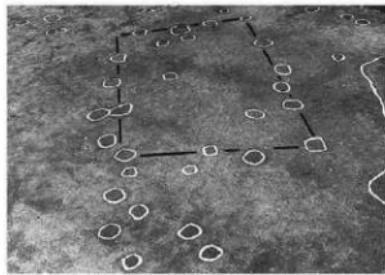
坂ノ下遺跡・SB2 挖立柱建物跡完掘状況（東から）



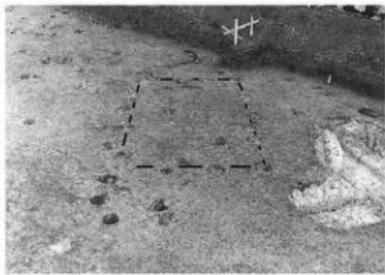
坂ノ下遺跡・SB3 挖立柱建物跡検出状況（南東から）



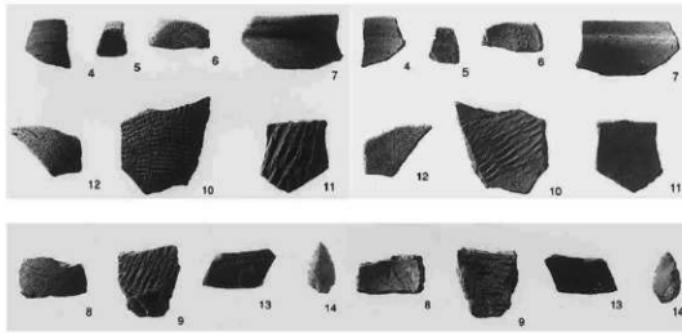
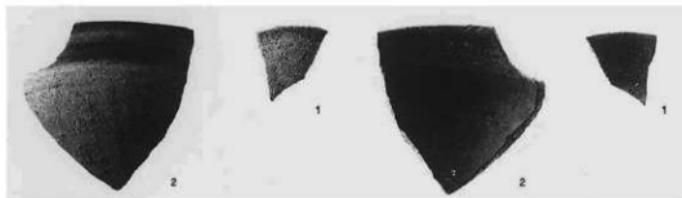
坂ノ下遺跡・SB3 挖立柱建物跡完掘状況（南東から）



坂ノ下遺跡・SB4 挖立柱建物跡検出状況（南から）



坂ノ下遺跡・SB4 挖立柱建物跡完掘状況（南から）



板ノ下遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いづみもりかまあと・さかのしたいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	泉森窯跡・坂ノ下遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第129集						
編集者名	野尻侃						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行月日	2004年3月31日						

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
泉森窯跡	山形県 酒田市 大字生石 字泉森	06204	平成13年度 登録	38度 54分 31秒	139度 59分 31秒	20010714 ～ 20010901	500	広域営農団地農道整備事業(飽海中央地区)
坂ノ下遺跡	山形県 酒田市 大字生石 字坂ノ下	06204	平成13年度 登録	38度 54分 38秒	139度 59分 10秒	20010820 ～ 20010914	780	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
泉森窯跡	泉森窯跡	平安時代	窯跡 土壙 灰原	瓦(軒丸瓦・丸瓦・平瓦) 須恵器(杯・皿・蓋・横瓶・壺・甕) 赤焼土器(小型甕)			国史跡「城輪柵跡」で 出土した軒丸瓦と同範 の瓦が焼成された窯跡 として注目される。 城輪柵跡創建危世纪初 頭に比定され、同時に 出土した土器類も造営 時期の第Ⅰ期に当たる れる。 (総出土箱数308箱)	
坂ノ下遺跡	集落跡	平安時代 中世	堀立柱建物跡 土壙	須恵器(杯・甕) 石器			平安時代から中世にかけ ての集落の一部で簡易 な建物跡を検出 (総出土箱数1箱)	

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第129集

泉森窯跡・坂ノ下遺跡発掘調査報告書

2004年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社
〒990-2251 山形縣山形市立谷川三丁目1410番1号
電話 023-686-6111